

大宰府史跡発掘調査報告書

平成 15 年度



2004

九州歴史資料館

大宰府史跡発掘調査報告書 平成15年度 正誤表

頁	行	誤	正
本文目次	7L	V 水城跡西端丘陵採集土器	(1) 経緯……44 を追加 (2) 採集土器……44 "
p 5	Tab. 3 第126次補足	地区割 6KKZ-L・M 面積 80㎡ 期間 040331	6KKZ-B 250㎡ 040521
p 7中扉	下から2L	(4) 出土遺物……19	20
p 13		Fig. 7 土層	21 暗黄褐色土 を追加 22 黄灰褐色土 23 赤褐色砂質土(礫混じる)
p 17	13L	調査面積は80㎡である	70㎡
	14L	観世音寺559番2	観世音寺4丁目559番2
p 19	Fig. 11土層	1 灰褐色土 3 暗褐色土	灰褐色土 暗褐色土
p 29	Fig. 17土層	12・14・16・19 真砂土	マサ土
p 31中扉	下から3L	(2) 基本層序……40	41
	下から2L	(3) 出土遺物……42	41
p 41	下から7L	須恵器 (Fig. 32, PL. 19-4)	Fig. 31
報告書抄録	第191次調査	観世音寺559番2 面積 80㎡	観世音寺4丁目559番2 70㎡

大宰府史跡発掘調査報告書

平成 15 年度

2004

九州歴史資料館



水城跡西端部丘陵から大野城跡を臨む

序

大宰府史跡の調査・研究は、5ヶ年を区切りとした計画を策定し、大宰府史跡調査研究指導委員会で案件を諮りながら実施致しております。大宰府史跡調査第7次5ヶ年計画は、特別史跡水城跡の規模・構造解明を目標に掲げ、現在、鋭意努力中であります。

本書は、計画調査として実施しました水城跡西端部の調査成果を中心に、「月山官衝地区」などの緊急調査結果をとりまとめたものです。特に、水城跡の調査では、掘立柱建物が発見され、建物の立地・規模などから望楼跡の可能性が出てまいりました。古の水城を想像するとき、東西に連なる大堤両側に博多湾方面を望む楼があり、東西両通用門と大堤前面に広がる濠の大きさに、人々は圧倒されたのではないかと考えられます。

また、今年7月には、北部九州地方を集中豪雨が襲い、特別史跡大野城跡を筆頭に水城跡や大宰府政庁跡などの古代史跡が壊滅的な被害を被りました。現在、その災害復旧に伴う調査・整備などの方策を検討中ですが、今後の計画的な対応が望まれます。

本書が、大宰府研究はもとより、文化財への理解と活用にご利用いただければ幸甚に存じます。

最後に、発掘調査にあたっては、大宰府史跡調査研究指導委員の先生方をはじめ、文化庁、太宰府市教育委員会、大野城市教育委員会、地元関係者各位に対し、御指導・御協力を頂いたことに深甚なる敬意を表します。

平成16年3月31日

九州歴史資料館長 森山 良一

例言

- 1 本書は、平成15年度に福岡県教育委員会が国庫補助を受け、九州歴史資料館において実施した大宰府史跡発掘調査の年次報告書である。

当館は、これまで、大宰府史跡の調査成果を年次の概報として刊行してきたのを改め、平成12年度からは正式の報告書として、『大宰府史跡発掘調査報告書』Ⅰ・Ⅱを刊行した。しかしながら、平成13年度には「大宰府政庁跡」の正式報告書を刊行したため、報告書の体裁に混乱を生じてしまった。従って、今後は、「大宰府政庁跡」と言ったように地区名を書名として冠した報告書を正式報告書として位置付け、年度ごとに刊行する報告書は年次の調査結果を取り纏めた年次報告書とする。

- 2 本書には、第7次5ヶ年計画に基づき実施した水城跡第36次調査、広丸地区の緊急調査として実施した第186次調査、月山地区の緊急調査として実施した第191次調査、政庁跡及び安養寺地区の立会調査、さらに水城跡の災害に伴う緊急調査を水城跡第37次調査として掲載した。なお、本年度末に実施した第126次補足調査(観世音寺講堂跡)の内容については、来年度刊行予定の『観世音寺』正式報告書に掲載することになっている。
- 3 発掘調査については、大宰府史跡調査研究指導委員会の指導と承認のもとに実施した。
- 4 本書に掲載した遺構図は、国土調査法第Ⅱ座標系に基づいて作成した。
- 5 本書に掲載した遺構実測図は、調査課高橋章・小田和利・吉村靖徳と大宰府市教育委員会井上信正が作成した。
- 6 出土遺物の実測・本書掲載図の製図作業は、上記調査課員の他に高田いく子・比嘉えりかが担当した。出土遺物の整理・復原作業は、発掘調査事務所において大田千賀子・中田千枝子・市川千香枝・高田雅子・井上弘子が行った。
- 7 本書に掲載した写真は、空中写真が(有)空中写真企画、その他の遺構・遺物は石丸洋及び各調査担当者による。
- 8 掲載図面中、土器の断面を黒塗りしたものは、須恵器であることを示す。
- 9 本書の執筆分担は、以下のとおりである。

I		高橋	
II	1	第186次補足調査	高橋
	2	第190次調査	高橋
	3	第191次調査	吉村
III	1	第189次調査	井上
IV	1	水城跡第36次調査	小田
	2	水城跡第37次調査	小田
V			小田

- 10 本書の編集は、小田が担当した。

本文目次

	頁
I 緒言	1
1 調査計画と組織	1
(1) 調査計画	1
(2) 調査組織	1
2 調査経過	3
II 大宰府跡の調査	
1 第186次補足調査(広丸地区の緊急調査)	7
(1) 調査概要	7
(2) 基本層序	7
(3) 検出遺構	7
(4) 小 結	10
2 第190次調査(政庁地区の立会調査)	11
(1) 調査概要	11
(2) 基本層序	11
(3) 検出遺構	11
(4) 小 結	14
3 第191次調査(月山地区の緊急調査)	17
(1) 調査概要	17
(2) 基本層序	17
(3) 検出遺構	18
(4) 出土遺物	20
(5) 小 結	24
III 観世音寺子院跡の調査	
1 第189次調査(安養寺地区の立会調査)	27
(1) 調査概要	27
(2) 基本層序	28
(3) 出土遺物	28
(4) 小 結	30
IV 水城跡の調査	
1 水城跡第36次調査(西端丘陵部の調査)	31
(1) 調査概要	31
(2) 基本層序	33
(3) 検出遺構	34
(4) 出土遺物	38

(5) 小 結	38
2 水城跡第37次調査 (土塁西端部の調査)	40
(1) 調査概要	40
(2) 基本層序	41
(3) 出土遺物	41
(4) 小 結	43
V 水城跡西端丘陵採集土器	44

挿 図 目 次

	頁
Fig. 1 大宰府史跡発掘調査地域図(1/5,000)	折込
第186次補足調査	
Fig. 2 土層模式図	7
Fig. 3 第186次補足調査遺構配置図(1/100)	8
Fig. 4 掘立柱建物S B4556実測図(1/60)	9
Fig. 5 第167・186次調査主要遺構配置図(1/300)	10
第190次調査	
Fig. 6 調査区西壁土層図(1/60)	11
Fig. 7 第15次調査北東隅拡張部(1/100)	13
Fig. 8 大宰府政庁跡第15・26・190次調査遺構配置図(1/400)	15
Fig. 9 復原整備された政庁跡を流れる水路	16
第191次調査	
Fig. 10 第191次調査遺構配置図(1/80)	18
Fig. 11 土坑S K4583実測図(1/40)	19
Fig. 12 第191次調査出土土器・陶磁器実測図(1/3)	21
Fig. 13 第191次調査出土瓦類実測図(1/4)	23
Fig. 14 月山官衙跡調査地位位置図	25
Fig. 15 月山官衙跡建物配置図(1/1,000)	26
第189次調査	
Fig. 16 第189次調査区位置図(1/2,000)	27
Fig. 17 北壁土層図(1/100)	29
Fig. 18 第189次調査出土遺物実測図(1/3)	30
水城跡第36次調査	
Fig. 19 水城跡発掘調査地域図(1/5,000)	折込
Fig. 20 水城跡西端丘陵部地形測量図(1/600)	折込
Fig. 21 A区周辺地形測量図(1/300)	32
Fig. 22 A区土層図(1/60)	33

Fig.23	孤立柱建物 S B175実測図(1/60)	34
Fig.24	貯蔵穴 S K174実測図(1/30)	35
Fig.25	B区周辺地形測量図(1/300)	36
Fig.26	竪穴住居 S I177実測図(1/60)	37
Fig.27	土坑 S K178実測図(1/40)	38
Fig.28	落込 S X176出土土器実測図(1/3)	38
Fig.29	大宰府羅城概念図	39
水城跡第37次調査		
Fig.30	水城跡第36・37次調査地位置図(1/2,500)	40
Fig.31	包含層出土土器実測図(1/3)	41
Fig.32	土塁西端崩落箇所土層図(1/60)	42
Fig.33	西端丘陵採集土器実測図(1/3)	44

表 目 次

	頁	
Tab. 1	調査計画表	1
Tab. 2	大宰府史跡調査研究指導委員会委員名簿	2
Tab. 3	発掘調査実施一覧表	5
Tab. 4	平成15年度大宰府史跡現状変更申請対応状況表	5

図 版 目 次

巻頭図版 水城跡西端部丘陵から大野城跡を臨む

第186次補足調査

- PL. 1 (1) 第186次調査区北半(南から)
(2) 第186次補足調査区全景(南から)

第190次調査

- PL. 2 (1) 第190次調査区(南西から)
(2) 調査区西壁土層(東から)
- PL. 3 (1) 第15次調査区(西から)
(2) 石敷遺構 S X346(東から)
(3) 石敷遺構 S X346(南から)
- PL. 4 (1) 回廊 S C350基壇化粧(北東から)
(2) 暗渠 S X356吐水口周辺の石積み(北東から)
- PL. 5 (1) 第26次調査区全景(東から)
(2) 溝 S D501、石列遺構 S X503(南から)
(3) 溝 S D501(北から)

- PL. 6 (1) 第26次調査築地 S A335・505(東から)
(2) 基壇状遺構 S X502(南から)
(3) 石列遺構 S X503(東から)

第191次調査

- PL. 7 (1) 第191次調査区遠景(気球写真・東上空から)
(2) 第191次調査区遠景(気球写真・東から)
- PL. 8 (1) 第191次調査区全景(気球写真・東上空から)
(2) 第191次調査区全景(気球写真・真上から)
- PL. 9 (1) 第191次調査区全景(南東から)
(2) 第191次調査区全景(北西から)
(3) 土坑 S K4583土層(南東から)
- PL. 10 (1) 第31次調査区全景(南から)
(2) 第31次調査区全景(東から)
(3) 第34次調査区全景(東から)
- PL. 11 第191次調査出土遺物

第189次調査

- PL. 12 (1) 第189次調査区北壁(東から)
(2) 調査区中央南北土層(東から)
(3) 調査区東壁(西から)
- PL. 13 (1) 調査区北壁土層(南から)
(2) 調査完了時(西から)

水城跡第36次調査

- PL. 14 水城跡から大野城跡を臨む(気球写真・南上空から)
- PL. 15 (1) 水城跡第36次調査A区全景(南から)
(2) 水城跡第36次調査A区全景(北から)
- PL. 16 (1) 掘立柱建物 S B175(南から)
(2) 貯蔵穴 S K174土層(東から)
(3) 落込 S X176土層(東から)
- PL. 17 (1) B区全景(気球写真・西から)
(2) 竪穴住居 S I177(南東から)
(3) S I177土層(東から)

水城跡第37次調査

- PL. 18 (1) 水城跡第37次調査区(東から)
(2) 土塁崩落箇所壁面(南東から)
- PL. 19 (1) 土砂堆積状況(南西から)
(2) 平坦面トレンチ(北西から)
(3) 水城跡第36次調査落込 S X176出土土器
(4) 水城跡第37次調査包含層出土土器
(5) 西端丘後部採集土器

I 結 言

I 調査計画と組織

(1) 調査計画

平成15年度は、大宰府史跡発掘調査第7次5ヶ年計画の第2年目にあたり、調査対象史跡を水城跡とし、従来の調査成果を踏まえて事業に対処している。水城跡の調査は史跡指定範囲を県教育委員会（調査は九州歴史資料館）が実施している他は、太宰府市と大野城市の両市教育委員会が調査を行っている。第7次の当初の調査計画は、大野城市側の水城跡土塁西端の取り付き部を予定していたが、大野城市教育委員会との協議により史跡整備の有効活用等々考慮し、取り付き部の更に西側の丘陵平坦部の発掘調査を行うことに変更した。

また、大宰府政庁跡東側の月山官衙跡において建造物改築に伴う現状変更申請が提出された。当該地は月山の南東裾部に位置し、官衙域との境界を知る上で重要な場所と判断し、緊急調査として調査計画に組み込んだ。

なお、観世音寺の調査については、平成14年度に金堂跡の発掘調査を実施した際、調査区南西隅部で回廊跡に関わる礎敷遺構及び東西方向に走る暗渠を検出していたが、調査期間・予算等の制約から回廊跡と断定するまでには至らず、翌年発掘調査を実施することとした。

これらの調査計画は、平成15年10月30・31日の両日に開催した大宰府史跡調査研究指導委員会（以下、指導委員会と記す）において審議され、計画案は概ね了承を得た。

平成15年度の発掘調査計画は、下表のとおりである。

Tab.1 調査計画表

区 分	場 所	所 在 地	面 積	備 考
月山官衙跡	政庁東側官衙	太宰府市観世音寺4丁目559-2番	70㎡	緊急調査
水城跡	水城跡西方部	大野城市下大利4丁目757-1番	120㎡	計画調査
観世音寺	観世音寺講堂跡	太宰府市観世音寺5丁目6番1号	80㎡	計画調査

(2) 調査組織

発掘調査の主体は九州歴史資料館で、発掘調査は当館調査課が行った。その組織は以下のとおりである。

総 括	館 長	森山 良一
	副 館 長	橋口 達也
	参 事	石山 勲
		石丸 洋
		横田 賢道
		高橋 章
庶 務	総務課 課 長	榎藤 繁利
	事務主査	井上 雅之

1 結 言

主任主事	水田 陽子
技 師	井上 美智子
	松本 優

調 査

調査課 課 長	高橋 章(兼務)
技術主査	小田 和利
同	吉村 靖徳
学芸一課 課 長	児玉 真一
主任技師	井形 進
同	酒井 芳司
学芸二課 課 長	石山 勲(兼務)
参事補佐	馬田 弘稔
主任技師	加藤 和歳

(整理作業員) 大田千賀子 市川千香枝 中田千枝子 高田雅子 井上弘子 高橋佑佳
高田いく子

(宛編作業員) 鬼木トミ子 丸山千代子 永田ルイ子 徳永シズエ 森永祐子 鎌原昌子
浜崎喜美子 初山幸子 吉麗次枝 竹山ミツエ 波多江由美子
力丸 薫 岩崎富貴子 青木弘美 比嘉えりか 石田智子
高橋慎二 魚住 修 荒木健二

なお、大宰府史跡については、調査研究を推進するにあたって遺跡の性格上あらゆる分野から総合的に取り組む必要があるため、歴史学・考古学・建築史学・造園学・都市工学等の専門家で構成する「大宰府史跡調査研究指導委員会」を引き続き設置し、同委員会の指導のもとに5ヶ年計画を策定し、その計画に従い調査を進めている。委員は下記のとおりである。

Tab.2 大宰府史跡調査研究指導委員会委員名簿

役 職	氏 名	職 業	専 門
委員長	笹 山 晴 生	東京大学名誉教授	歴 史 学
副委員長	小 田 高 士 雄	福岡大学教授	考 古 学
委 員	八 木 充	山口大学名誉教授	歴 史 学
	川 添 昭 二	九州大学名誉教授	歴 史 学
	狩 野 久	京都橘女子大学教授	歴 史 学
	佐 藤 信	東京大学大学院教授	歴 史 学
	坂 上 康 俊	九州大学大学院教授	歴 史 学
	西 谷 正	九州大学名誉教授	考 古 学
	町 田 章	独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所長	考 古 学
	山 中 章	三重大学教授	考 古 学
	鈴 木 嘉 吉	元奈良国立文化財研究所長	建 築 史 学
	澤 村 仁	九州芸術工科大学名誉教授	建 築 史 学
	中 村 一	京都大学名誉教授	造 園 学
杉 本 正 美	神戸芸術工科大学教授	造 園 学	
渡 辺 定 夫	工学院大学教授	都 市 工 学	

2 調査経過

今年度の調査計画は、昨年度の指導委員会において承認された水城跡西方部の発掘調査及び月山官衙跡の現状変更申請（仏心寺納骨堂建替え）に伴う緊急発掘調査（大宰府史跡第191次調査）である。発掘調査は年度当初から大宰府史跡第191次調査に取り掛かる予定であったが、地権者との協議により、6～7月の2ヶ月間を調査期間にあてた。また、計画調査である水城跡の調査は、梅雨と真夏の時期を避けた9月から開始することとした。

月山官衙跡は、これまでの調査成果により東西112m、南北71mの長方形に櫓を巡らすことが明らかになっている。櫓内からは両面側の南北棟建物や2×3間の総柱建物など掘立柱建物9棟が検出されており、他に目隠し塀や溝などが発見されている。建物群の北半部には民家があるため官衙の全容を明らかにできない悔しさがあるが、櫓内の南半部を中心に遺構が確認されている。また、櫓S A560の東西長は、大宰府政庁跡の東・西面回廊芯々の長さに符合することは興味ある事実である。

今回の現状変更申請地は、西側櫓S A559の北側延長部にあたり、掘立柱建物や櫓が月山とどの様に接しているのかを確認することになり、興味が持たれる調査である。調査箇所は月山の東側に接した部分で、地番は大宰府市観音寺4丁目559-2番である。4月初の時点、調査地には既存の納骨堂があり、建物の解体工事の進捗状況から発掘調査は6月4日から開始した。なお、懸案であった月山と官衙跡の接点であるが、調査の結果、欄なし溝は検出しておらず、遺構面はなだらかに傾斜していた。後世の削平が著しいこともあり、今回の狭い範囲の調査から結論付けるには時機尚早ではあるが、欄・溝は月山に接するところで終わっている可能性が高い。調査の終盤にあたり梅雨時期に入り、しかも遺構面が現地表から深く、排水作業に苦慮したが、7月17日に調査を終了した。調査面積は約70㎡であった。

水城西門跡周辺の調査としては、大宰府市教育委員会が第15・21・25次調査を実施し、当館が第9・26（西門跡）・33次調査を行っている。西門跡の調査では門建物のⅢ期変遷を確認し、第33次調査では大宰府側基底部で建物群を検出し、第9・21次調査で東側（大宰府側）への落込などを確認するに至っている。

計画調査である水城跡の発掘調査は、第36次調査として約120㎡を調査対象とした。地番は大野城市下大利4丁目757-1番他である。当初の計画では、水城跡土塁西端の取り付け部の調査を予定していたが、大野城市の水城跡整備活用方針の一環から、取り付け部より更に西側の丘陵を調査することとし、平坦部に2箇所の発掘区を設定した。

調査は9月8日から開始した。当該地は凹凸が著しく、土取りして整地したと見られる所や戦後米軍のダンスホールに使用された建物のコンクリート基礎が現存しているため、発掘区の設定は比較的平坦な場所を選定した。調査の結果、最も高台の平坦部で1×2間の南北棟掘立柱建物を検出した。10月30日に行われた指導委員会の現地視察では、先の掘立柱建物の性格として望楼跡の可能性が指摘され、新聞報道では水城跡で初の展望施設が発見されたと報道された。調査のもう一つの目的は、水城跡の詳細な地形測量図の作成にあり、広範囲の測量に時間をやや費やした。調査期間中、吹雪に祟られたが、年明けの1月13日に全てを終了した。

また、平成15年7月19日未明に大宰府市域を襲った集中豪雨は、大規模な土石流を引き起

月山官衙跡

長方形区画

望楼跡の可能性

集中豪雨

1 緒言

こし、道路の損壊・家屋の崩壊や死者一名を出すなど市民生活に甚大な打撃を与えた。大宰府史跡が被った被害も未曾有のものであり、特に大野城跡では数箇所です壁・土壘が崩壊し、散々たる有様であった。水城跡も東門跡東側と西門跡西端部で土壘が大きく崩壊した。東門跡東側は以前の調査により、版築土壘ではなく自然丘陵であることが確認されていたため災害復旧は迅速になされたが、西門跡西端部側においては自然丘陵であるか、版築土壘であるか明確には確認されていなかった。このため、水城跡第36次調査の期間中に災害復旧工事の事前調査として発掘調査（水城跡第37次調査）を行った。結果的には、自然丘陵の旧表土を検出しており、崩壊した土砂そのものは昭和の初め頃に建物を建築する際に丘陵を削平して排出した土砂を盛ったものであることが判明した。

観世音寺の調査は、昨年金堂跡の調査を実施した際、西面回廊に関わると考えられる礎敷遺構及び東西方向に走る暗渠を検出していたが、調査期間・予算等の制約から回廊跡に関連する遺構であると断定するに至らず、懸案事項として翌年に持ち越すこととなった。また、回廊跡については溝などが北東隅部で確認されているものの、東面回廊跡と断定するには若干資料不足であったため、今回、金堂・講堂・北面回廊跡にトレンチを設定し再確認することにした。

発掘調査は平成16年1月19日から開始し、酷寒の中、作業員一同遺構検出に汗を流した。調査の序盤、近年では希にみる大雪に見舞われ、数日間作業を中断せざるを得なかった。調査の結果、創建当初の講堂礎石とみられていた礎石の下層から、古い時期の根石・掘方を検出し、大規模に改築していたことが判明した。さらに、北面西回廊の根石も検出し、多大なる成果を収めた。

下層の根石

なお、昨年度実施した観世音寺金堂跡及び今年度実施した講堂・北面回廊跡の調査内容に関しては、次年度刊行予定の『観世音寺』発掘調査報告書に掲載することとしているため、今回の年次報告書からは割愛している。

Tab. 3 発掘調査実施一覧表

年度	史跡名	調査回数	調査地区別	調査箇所	調査原因	調査面積(m ²)	調査期間	調査担当者
15	大宰府跡	第191次	6AYT-C	月山宮跡跡	仏心寺納骨堂建設に伴う緊急調査	70	030604~030717	吉村
	観世音寺	第126次補足	6KZ-L・M	観世音寺講堂・北面回廊跡	計画調査	80	040119~040331	高橋・小田
	水城跡	第36次	6AMK-X	水城土塁西端土塁崩壊部	計画調査	120	030908~040113	小田
	水城跡	第37次	6AMK-V	西門跡西端部土塁崩壊箇所	災害復旧に伴う緊急調査	20	031205~031219	小田

Tab. 4 平成15年度大宰府史跡現場状況変更申請対応状況表

申請日	申請者	理由	申請地	面積㎡	指定区分	文化庁等指示	対応内容
7月14日	九州歴史資料館長	発掘調査	大野城市下大町丁目757-1番地	600	特別史跡水城跡	許可	九歴発掘調査
8月1日	春日市長	排水施設設置	春日市大字上白水276-4, 280-3, 283-1番地		特別史跡水城跡(天神山小水城)	工事許可	春日市立会
8月1日	春日市長	法面保土	春日市大字上白水280-2, 280-3, 280-4番		特別史跡水城跡(天神山小水城)	工事許可	春日市立会
9月16日	福岡県水産林務部治山課	緊急治山	太宰府市大字園分字薬山972-1, 973-1番地	2,500	特別史跡大野城跡	工事許可	太宰府市立会
9月16日	福岡県水産林務部治山課	緊急治山	太宰府市大字太宰府字原194-14, 194-31番	5,000	特別史跡大野城跡	工事許可	太宰府市立会
9月18日	太宰府市長	道路復旧	太宰府市大字観世音寺715-54, 715-55番	2,565	特別史跡大野城跡	工事許可	太宰府市立会
10月10日	大野城市長	道路復旧	太宰府市大字太宰府1491-1, 1790-16番地		特別史跡大野城跡	工事許可	大野城市立会
11月11日	太宰府市長	災害復旧	太宰府市大字坂本字古野津406, 407-1番		特別史跡大宰府跡	工事許可	太宰府市立会
11月28日	福岡県水産林務部治山課	緊急治山	太宰府市大字園分2丁目, 園分字妙見, 太宰府字原		特別史跡大野城跡	工事許可	太宰府市立会
12月2日	宇美町長	道路復旧	太宰府市大字観世音寺字浦田, 同字村上		史跡観世音寺境内および子院跡	工事許可	宇美町立会
12月2日	宇美町長	河川護岸復旧	宇美町大字四王寺字大字大石垣299, 308番		特別史跡大野城跡	工事許可	宇美町立会
12月15日	九州歴史資料館長	発掘調査	宇美町大字四王寺字内/谷合切1100番地	150	特別史跡大野城跡	許可	九歴発掘調査
12月19日	福岡県西農林事務所長	復旧治山	太宰府市大字四王寺字長谷64-2		特別史跡大野城跡	工事許可	宇美町立会
12月22日	福岡県西農林事務所長	緊急治山	太宰府市大字太宰府字原1491-14		特別史跡大野城跡	工事許可	太宰府市立会
12月25日	九州電力株式会社	災害復旧	宇美町大字坂本字原田谷山283-52	82.3	特別史跡大野城跡	工事許可	宇美町立会
12月26日	太宰府市教育委員会教育長	災害復旧	太宰府市大字吾松475-13番地		特別史跡水城跡	工事許可	太宰府市立会
1月6日	福岡県水産林務部緑化推進課	県民の福祉復旧	太宰府市観世音寺5丁目715-117, 715-33番		史跡観世音寺境内および子院跡	工事許可	太宰府市立会
			宇美町大字四王寺字八少波219-1番地		特別史跡大野城跡	工事許可	福岡県立会



Fig. 1 大宰府史跡発掘調査地域図(1/5,000)

II 大宰府跡の調査

1	第186次補足調査 (広丸地区の緊急調査)	
(1)	調査概要	7
(2)	基本層序	7
(3)	検出遺構	7
(4)	小 結	10
2	第190次調査 (政庁地区の立会調査)	
(1)	調査概要	11
(2)	基本層序	11
(3)	検出遺構	11
(4)	小 結	14
3	第191次調査 (月山地区の緊急調査)	
(1)	調査概要	17
(2)	基本層序	17
(3)	検出遺構	18
(4)	出土遺物	19
(5)	小 結	24

1 第186次補足調査（広丸地区の緊急調査）

(1) 調査概要

経 過 大宰府政庁跡の前には通称五条大通り（県道筑紫野古賀線一往還道路）が東西に走っている。この道路の南側一帯は、昭和時代に太宰府市が実施した都市区画整理事業で出来た保留地である。この政庁跡前面域からは、獨立柱建物・欄・溝・井戸・土坑など多数の遺構が検出され、日吉・不丁・大楠・広丸官衙跡と称される官衙域が広がっており、大宰府政庁官衙跡を究明してゆく上で欠かせない地区となっている。従って、この地区で発掘調査の必要性が生じた場合、当館の計画調査に組み込んで十数年来発掘調査を進めてきた経緯がある。

今回の調査地は、従来からの太宰府市の懸案事項であり、当該地の住民から県道に接続する道路を建設して欲しい旨の要望が出されていた。これまでの経緯により太宰府市から当館に調査依頼があり、平成15年3月10日に発掘調査を開始し、3月17日に全てを終了した。

位 置 広丸地区官人居住域と称され、大宰府に勤務する役人の居住地と考えられてきた地区にあたる。地番は太宰府市観世音寺2丁目217番である。今回の調査地区の西側は第186次調査地で、東側が第167次調査地であり、大宰府政庁中軸線から西へ約400m隔たった地点である。現在、調査地周辺には住宅が密集している。

広丸地区官人居住域

(2) 基本層序

本調査地区の地形及び基本層序については、平成13・14年度の調査報告書の中で詳細に述べているため、ここでは発掘調査で確認した土層の堆積状況について記すこととする。

層序は、上層から客土（マサ土-50~70cm）、旧表土（黒灰色土-約10cm）、水田床土（黄灰色粘質土-約5cm）、包含層（黄灰色砂質土-約13cm）で、その下が黄褐色粘質土（地山）の遺構検出面となる。更に掘り下げると黒灰色粘土層となるが、日吉・不丁地区ではこの黒灰色粘土を採取するための大規模な採土遺構が検出されている⁽¹⁾。また、包含層とした黄灰色砂質土にはごく少量の土師器片や須恵器片を含むが、器形を復原できるものはない。黄灰色粘質土とその下層の黄灰色砂質土は、第186次調査で言う旧水田床土である。現在、花崗岩バイラン土（マサ土）が現地表面となっているが、これは昭和時代に区画整理事業で盛土した土層で、生活道路面として利用されていた。



Fig.2 土層模式図

(3) 検出遺構

調査は生活道路として利用していた箇所に、東西幅約3m、南北長約14mのトレンチを設定し、第186次調査検出の獨立柱建物S B4556、第167次調査検出の欄S A4425及び堅穴住居S I4220の規模などを確認することを主眼とした。現地表から遺構面までの深さが75~80cmあり、かつ、上層の客土が堅く締まっており、除去するのに大変苦労した。

II 大宰府跡の調査

掘立柱建物

SB4556 (Fig.3・4, PL.1-1)

調査区南半部で径42cmの柱穴を1個確認した。この柱穴は第186次調査で検出した掘立柱建物SB4556の南側桁行の延長線上にあり、柱間及び柱穴の形状・規模が類似していることからSB4556の柱穴とみなすことが可能である。なお、昨年度の第186次調査の報告では、東西3間の可能性があったとされていたが、今回の調査で2間であることが確認された。残念なことに北東コーナーの柱穴は検出されなかった。改めて建物規模は、梁行柱間芯々距離が7尺

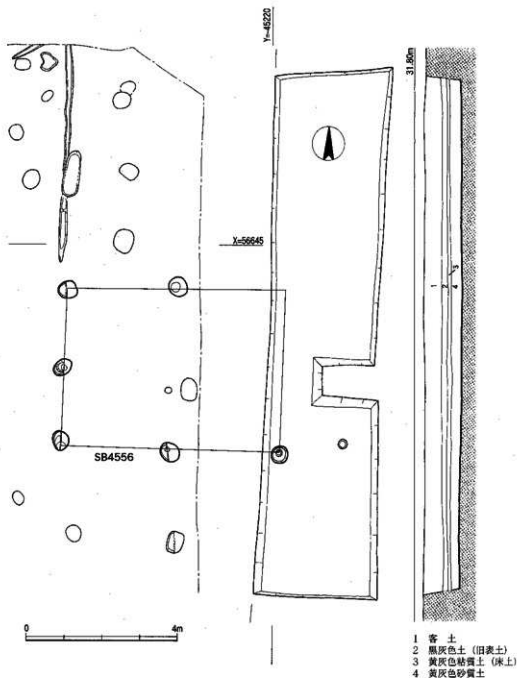


Fig.3 第186次補足調査遺構配置図 (1/100)

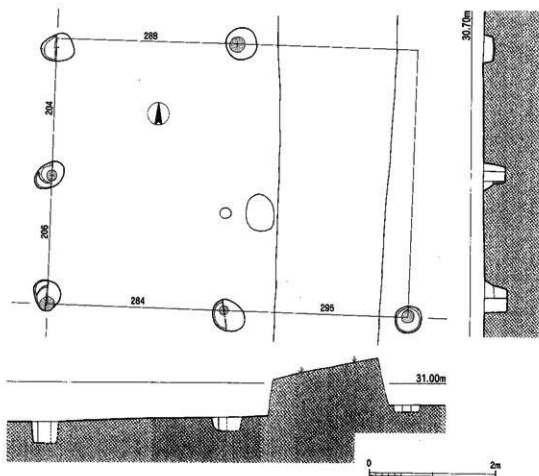


Fig. 4 掘立柱建物 S B 4556 実測図 (1/60)

(1尺=30cm) 等間で、桁行は9.5尺である。柱穴は径40~60cmの円形で、柱痕跡は径15~26cmを測る。今回もそうであるように第186次調査結果においても出土遺物が無く、建物の性格及び時期等を判断し難い状況にある。

櫓

S A 4225 (Fig.5)

平成7年度に発掘調査したおり、東西・南北共に3間以上の櫓を検出した。柱間寸法は4.5~5尺で、南北軸は東側に3' 30" 振れている。また、竪穴住居 S I 4220を囲む櫓と報告されている。今回の調査では、柱穴は検出されなかった。しかし、柱穴底面の標高が30.7mで、今次調査の遺構検出面の標高が30.75mであるため、柱穴が存在していたとしても既に削平された可能性が高い。また、竪穴住居 S I 4220を囲む櫓という考えは否定できないが、掘立柱建物になるかも知れない。

竪穴住居を
囲む櫓

竪穴住居

S I 4220 (Fig.5)

第167次調査で検出されていた竪穴住居は、今回の調査では確認できなかった。ただ、竪穴住居の東壁長は2.7mで、住居の東壁から今回の調査区までの距離が3.4mを測ることから、住居壁の長さが3.4m以上なければ検出できないことになる。恐らく、西壁は未掘部分の中に

II 大宰府跡の調査

存在するものと思われる。

なお、今回の調査では、遺構上面の包含層及び柱穴からは、何ら遺物の出土はなかった。

(4) 小 結

『大宰府史跡調査報告書II』（平成13・14年度）の第186次調査では、今回の調査区を含めて「広丸地区官衙城」と断定し、8世紀後半以前には官衙相当の規模を有した建物が企画性を持ち一群をなしていた可能性があると指摘されている。未だ全体像は明らかにし得ないが、不丁地区及び日吉地区の掘立柱建物とはやや趣を異にしているようである。検出した掘立柱建物SB4556は、西側に隣接する柱掘方の大きい掘立柱建物SB4550A・B建物の付属建物として計画的に配置されたと調査担当者は報告しているが、周辺の建物配置状況・出土遺物等を詳細に検討してからの判断としたい。

近年、大宰府政庁前面域は、都市計画事業の推進により宅地化が猛スピードで進行しており、発掘調査によって明らかにすべき箇所が僅少となっている。当地区は大宰府を解明してゆく上で欠かせない重要な地区であるため、将来、刊行予定の正式報告書を念頭に置きながら詳細な検討を加えたい。

註1) 黒色粘土を採掘した探土遺構は、不丁地区を中心として第58・73・78・84・86・87・131・134次調査及び日吉地区の第153・156次調査で検出されている。

『大宰府史跡』平成6年度発掘調査概報 1995 九州歴史資料館

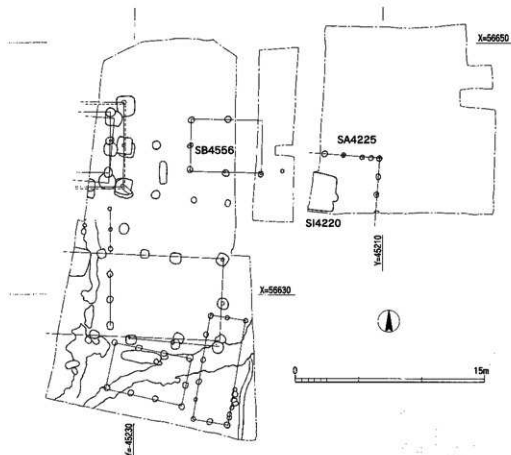


Fig.5 第167・186次調査主要遺構配置図 (1/300)

2 第190次調査（政庁地区の立会調査）

(1) 調査概要

経 過 現在の大宰府政庁跡は、昭和43年から発掘調査が進められ、その成果を基に第三期政庁跡を復原した史跡整備が行われている。年間、多方面から多くの人々が訪れ、最近では「総合的な学習の時間」において、小・中学生が郷土の歴史を学ぶ上で格好の場を提供している。

平成14年5月頃、その政庁跡の東側に位置する公衆トイレの改修事業を実施したい旨の連絡が大宰府市教育委員会からもたらされた。トイレは昭和40年代に建設したもので老朽化が進んでおり、併せて汲み取り式のため悪臭がひどく、観光客や地域住民から苦情が寄せられていた。更に、下水道法の規定により早急な整備が迫られていたため、市下水道課は現状変更申請の手続きを取った。これを受けて、10月24日に大宰府市関係各課と調査日程等の協議を行った。

また、既存建物の面積が24.2㎡であるのに対し、今回の新設建物は設計上50.7㎡と約2倍の大きさになっていた。既存建物部分については、従前の立会調査で遺構が無いことを確認していたが、現状変更の場所が大宰府政庁跡と言うこともあり、念のために拡張する部分については立会調査で対応することとした。調査は既存建物の撤去作業の関係から、平成15年1月14・15日の両日に行った。

位 置 大宰府政庁跡東面回廊と後面築地の接続部東側にあたり、月山の西麓部に位置する。地番は大宰府市観世音寺4丁目535-1番である。

(2) 基本層序

層序は上層から整備盛土（約30cm）、旧表土（黒灰色土-15~25cm）、床土（暗黄灰色粘質土・黄褐色粘土-5~15cm）で、床土から地山（黄灰色粘質土）までの間に暗灰色砂質土・暗黄灰色粘質土・暗茶褐色砂質土が堆積していた。この土層堆積状況は、第15次調査北東隅拡張部及び第26次調査で確認した層序に類似している。

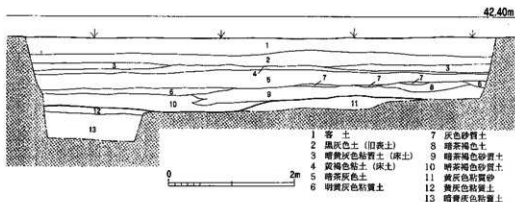


Fig. 6 調査区西壁土層図 (1/60)

(3) 検出遺構

調査対象地に幅3m×長さ7.5mのトレンチを設定し、重機で掘削した。先に記した様に、床土から地山の黄灰色粘質土までの約60cm間には砂質土・砂層が堆積しており、流水による

II 大宰府跡の調査

流水による
堆積層

堆積層であることを示している。地山の黄灰色粘質土上面では遺構は検出されず、そこから50cm程掘り下げたが、暗青灰色粘質土が堆積しているのみで遺物も発見されなかった。なお、遺物は床土中から8世紀後半頃の須恵器口縁部小片が1点出土しただけである。

また、当該地近辺の調査としては、第15次調査（政庁跡東面・北面回廊の調査）と第26次調査（政庁跡北東隅築地の調査）がある。「大宰府政庁跡」及び「大宰府史跡発掘調査概報」でふれられていない回廊・築地の東側の遺構について補足することとし、今回の調査との関連を考えてみたい。

〔第15次調査〕

第15次調査では新旧二時期の回廊・雨落溝、築地、掘立柱建物、石敷遺構等を検出した。ここでは、回廊・雨落溝・暗渠・石敷遺構について述べる。

回廊 S C340・350

S C340は北面回廊で、S C350が東面回廊である。共に新（Ⅲ期）・旧（Ⅱ期）二時期を確認した。Ⅱ期の礎石は殆どが抜かれており、Ⅲ期の礎石として転用したものと考えられる。回廊全体の規模は基壇外縁で南北長120.75m、東西幅119.2mで、内縁距離は東西・南北とも106.1mである。

暗渠 S X356

東面回廊 S C350の北側延長上には後面築地 S A335が北に延び、S C350と S A335の接続部分には、後面築地内の降水を築地外に排出するために暗渠排水施設（S X356）が設けられている。暗渠 S X356は底部に人頭大の扁平な花崗岩を敷き、側壁も同様な石を並立てていた。底面は雨落溝 S D345側に僅かに傾斜している。石組み部分の長さは3.6mで、内法での幅0.4m、高さ0.45mを測る。蓋石は3枚残存していた。

雨落溝 S D345

「大宰府史跡発掘調査概報⁽¹⁾」では、「東の肩が不明確であるが幅約3.5mである。これは東面回廊の雨落ち溝と北方からの排水をも兼ねているものと思われる」と記されている。また、「大宰府政庁跡⁽²⁾」では、後面築地 S A335と東面回廊 S C350の基壇化粧として図面は掲載されているが（政庁跡報告書Fig.85）、「S D345は後面築地 S A335及び東面回廊 S C350の東側雨落溝である。東面回廊の雨落溝と北方からの排水の役目を兼ねていたと考えられる。第15次調査では溝幅約3.5mを確認しているが、北側の東北築地隅部（第26次調査）では溝の痕跡は確認できなかった」と記されている程度である。

この雨落溝 S D345の西壁は、後面築地 S A335と東面回廊 S C350の基壇化粧でもあり、積石には準大から大きなもので長さ60cm程の花崗岩割石が乱石積みされ、下部には比較的大きな石が配されていた。また、部分的ではあるが、暗渠 S X356付近やその南側において鬼瓦片・縄目甲平瓦片等が石積みの目詰めとして用いられていた。

また、第15次調査区の北東隅部を拡張したトレンチの土層観察結果では、S D345の上面に厚さ30～50cmの暗灰色粘質土層が堆積していることから泥炭質土砂の滞水状況が確認できる。この層は石敷遺構 S X346を覆っておらず、S X346に被る暗黄灰色砂質土（砂礫・縄目瓦を含む）の様に流水状況が見られないことなどから、早い時期に土砂が堆積したものと思われる。

石敷遺構SX346

後面築地SA335の基壇化粧から5.5m東側に位置し、南北長2.7m、東西幅1.2m分を抽出した。敷石の状況は、径10～20cmの割石を丁寧に敷き並べている。先の土層図（Fig.6）を詳細に観察すると、基壇化粧から東側4.5mの部位で地山が立ち上がり、石敷の東側においても地山が石敷面近くまで上がり、基壇状の高まりとなっている。基壇状の高まりの西側には拳大の石が若干みられ、この石は石敷が掘削されたか、流されたものであろう。また、石敷面と基壇化粧上面のレベル差は殆ど無い。これらを勘案すると、石敷遺構SX346は基礎部幅約4m、推定上面幅約3mとなり、回廊に平行した石畳の歩道の可能性が考えられる。

石畳の歩道

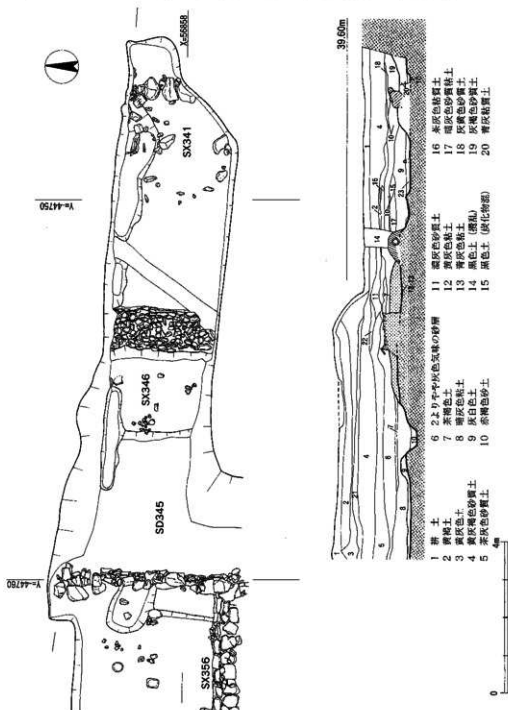


Fig.7 第15次調査北東隅拡張部 (1/100)

II 大宰府跡の調査

石列遺構SX341

石敷遺構SX346の東端から約5.5m東側で検出した。径50～60cmの自然石を南北方向に4個以上並べたものである。付近には拳大から人頭大の石が見受けられることから、数段積み重ねられていたことが想定される。また、SX346との間には瓦を含む砂礫層が堆積し、木杭等が確認できた。流れが強かった状況が土層からも観察できる。ただ、石列の東側が未調査なので、当遺構が如何なる構造・性格を有するかは定かではなく、今後の究明課題として残った。

〔第26次調査〕

第26次調査では、礎石建物・築地・雨落溝・廃棄土坑・石列遺構等を検出した。ここでは、築地・溝・石組遺構について述べる。

築地SA335・505

SA335が後面築地で、SA505が後面北築地である。第15次・第41次調査の結果から築地も新(Ⅲ期)・旧(Ⅱ期)二時期あり、Ⅲ期の築地幅は3.6mとⅡ期よりもやや広がっている。Ⅱ・Ⅲ期共に基礎化粧は花崗岩の割石を用いた乱石積みである。第41次調査の結果では、基礎中央に幅1.5mで版築が認められ、これを築地本体とし、外側に0.9m、内側に1.2mの犬走りを復原している。

SA335の東側には、南北溝SD501、落込SK504、不明遺構SX502等があるが、全体として大きな流路状の遺構となっている。

南北溝SD501

調査区北東隅で検出した。大きな溝というより流路と判断した方がよい。堆積土は灰色砂・茶灰色砂・暗茶灰色荒砂・黒色粘土・茶褐色砂質土等に瓦や土器等が混在し、入り組んだ互層を呈していた。このことから、流れが強かったことを物語っている。出土遺物から埋没時期は中世と判断される。

不明遺構SX502

基壇状に一段高くなった遺構で、南東・南西側に20cm大の自然石がみられたが、整然と敷き詰めた状況ではない。遺構の大半は発掘区北側に延びている。この高まりが整地によるものなのか確認できていないことから、今後の調査結果に譲ることとした。

石列遺構SX503

南北溝SD501の南側で拳大から40cm大の自然石が南北約6m、東西約3mの範囲で散乱した状態で検出された。中でも、その中央部で20～40cm大の石が東側を石面として7～8個認められた。SD501の流路の中央部でもあり、どの様な性格の石列なのかは明らかでない。石とともに「賀茂瓦」銘の文字瓦が出土している。

落込SK504

SA335の東側で南北長約28m、東西幅約6mの大きな落込みを検出した。落込みは更に南へ延びており、多数の瓦が出土している。

(4) 小 結

第190次調査では遺構は確認されなかった。地山上面の砂質土等からこの近辺が流路であっ

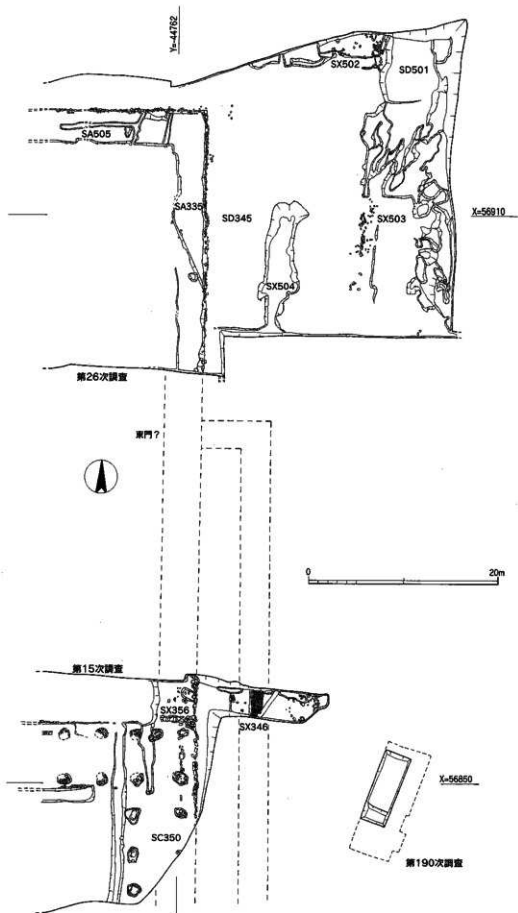


Fig.8 大宰府政庁跡第15・26・190次調査遺構配置図 (1/400)

II 大宰府跡の調査

たことが想定される。そこで、第15次・第26次調査の結果を勘案しながら大宰府政庁跡と月山に挟まれた箇所の様相についてまとめておきたい。

南北溝SD501という大きな流路は、遺構上面に厚く堆積する砂層の状況から中世に至るまで築地・回廊をかなり脅かしていたものと推測される。この事は、後面東築地SA335の基礎化粧の改修が物語っている。現在も北側から流れる谷部にあたっている。

次に、石列遺構SX341を北側に延長するとやや東側に振れるものの石列遺構SX503に接続する可能性があり、回廊・築地等を保護するための石組残欠ではなかろうか。ただ、月山南側の第35次調査では、大きな流路の中央部でSD688・689の様な石組溝も発見されており、今後の詳細な検討を必要とする。

石敷遺構SX346は、石敷上面で約3mの幅を有し、東面回廊と平行する通路の可能性を考えた。この延長部は第26次調査では確認されていないことから、この通路がどこまで延びていたかは不明であるが、丁度築地の中央部で西に折れ曲がると仮定した場合、築地に門の存在を考へなくてはならない。再び、後面築地東門の存在を探る必要があると思われる。

この他にも政庁地区においては、Ⅰ期遺構の創建年代及び全体像と性格付け、Ⅱ期遺構の造営年代、Ⅱ・Ⅲ期内底部の状況、Ⅲ期遺構の廃絶時期等々残された課題は山積している。大宰府政庁跡の報告書は刊行したものの、それで政庁跡の調査・研究が終わったと言うわけではなく、今後とも課題解決に向けて努力していきたい。

註 1) 「大宰府史跡」昭和47年度発掘調査略報 1973 九州歴史資料館

2) 「大宰府政庁跡」2002 九州歴史資料館



Fig.9 復原整備された政庁跡を流れる水路

3 第191次調査（月山地区の緊急調査）

(1) 調査概要

経 過 平成14年9月、特別史跡大宰府跡の史跡指定地内に所在する宗教法人仏心寺から、現在の納骨堂を解体して鉄筋瓦葺建物を新築する旨の届出があった。これを受け、申請者・大宰府市教育委員会・九州歴史資料館の三者間で数度の協議を行い、申請者に対して、事前に地下遺構の状況把握が必要である旨を伝えた。そして、平成14年12月9日付で現状変更許可申請書が提出され、平成15年2月21日付の文化庁通知において発掘調査の指示が出された。

発掘調査については大宰府市との協議の結果、九州歴史資料館が実施することとなり、既存建物解体後の平成15年6月4日より重機を投入して表土剥ぎを始めた。6月9日には遺構検出を開始し、同月24日に槽と気球による写真撮影を行う。翌25～27日で整地層の除去等の精査を終了し、人力による埋め戻しにかかった。途中、梅雨を迎え、雨天による埋め戻し用廃土の軟弱化のため作業は遅々として進まなかったものの、7月17日には現場作業を完了し、石材撤取を行った。調査対象面積は161㎡で、発掘調査面積は80㎡である。

位 置 調査地は、大宰府市観世音寺559番2に所在する。大宰府政庁の東側に接して位置し、南北に延びる月山丘陵の南端部に当たっている。現状では南側の史跡整備地と約1.5m程の段差をもった高い部分に位置している。第191次調査地は、これまでに実施した第31次・34次・35次・72次・99次・181次調査等の成果によれば、一本柱跡によって囲繞された官衙城の西端部の一面を占めることになる。

一本柱堀

今回の調査では、調査地内における官衙関連遺構の有無を確認すること、及び北側の月山丘陵との取り付き部の状況を把握することを主眼とした。

(2) 基本層序

現状での標高は最も高い月山丘陵の際で39.3mを測り、発掘区の南端部とは45cm程の高低差がある。遺構面もまた、北から南に向かって傾斜しており、標高はそれぞれ38.45m、38.05mを測る。基本層序は上位より①明黄褐色土（マサ土）、②明黄褐色土（マサ土）+暗褐色土、③暗褐色粘質土、④暗褐色粘質土+橙褐色砂質土、⑤暗褐色粘質土（しまりがなく、炭を多く含む）、⑥暗褐色粘質土+マサ土、⑦暗褐色粘質土（砂質土混）、⑧茶褐色粘質土で、その下位が地山となる。このうち①・②層が現代の盛り土（厚さ50～65cm）、③・④層が中世以降の遺物包含層（厚さ55～85cm）、⑤～⑦層が古代以降の包含層（厚さ30cm）である。⑧層は茶褐色粘質土で、奈良期の遺構はこの面から切り込まれている。この層については、一部トレンチを設定して地山面を追った結果、その下部に遺構が存在しないことから奈良期に至って整地されたものと考えられる。なお、地山は北側から花崗岩パイラン土→橙褐色粘質土→明黄白色粘質土と漸移しており、花崗岩パイラン土から橙褐色粘質土に移行する部分が概ね月山丘陵の裾にあたるものと考えられる。遺物は③・④層、⑤層、⑧層から出土しており、それぞれ暗褐色土層、炭層、整地層として報告する。

月山丘陵の裾部

II 大宰府跡の調査

(3) 検出遺構

発掘区の北西壁際から6.5m程の部分には段落ちが存在し、これより南東側にのみ奈良期の遺構が広がる。この段落ちの下端が月山丘陵部分にあたり、それよりも北西部のフラット面には、中世以降に属するS D 4581が存在するのみで、旧地形は近年の削平を受けている。

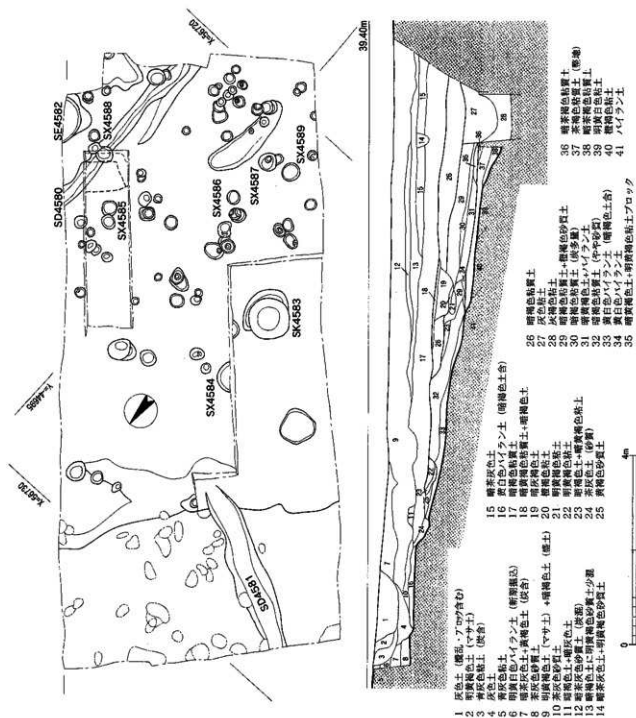


Fig. 10 第191次調査遺構配置図 (1/80)

溝

SD4580 (Fig.10)

調査区の東端部で検出した南北方向に走る溝で、整地層に切り込む。幅0.2m、深さ0.1mを測る。南北とも発掘区外に延びる。埋土は暗茶褐色粘質土で、須臾器が出土した。

SD4581 (Fig.10)

調査区北西部の地山面で検出した溝で、南東側は暗褐色土（遺物包含層）を切っている。幅0.7m、深さ0.15mを測る。長さ3.5m分を確認したが、南東側は終息し、北西側は発掘区外に延びる。埋土は暗茶灰色砂質土。

井戸

SE4582 (Fig.10)

調査区の東端部で検出し、半分程は発掘区外となる。③層下面から掘り込まれている。井戸と考えられる明確な掘方はなく、遺構の壁に沿って杵と考えられる木質が僅かに遺存していた。径は1.05mを測る。埋土は上層に灰色粘土がレンズ状に堆積し、下層は灰褐色粘土である。表土から既に2.5m程掘り下げていたうえに壁面が崩壊しかけていた事もあり、下層の掘削を断念した。瓦片が出土。

土坑

SK4583 (Fig.11, PL.9-3)

調査区の中央部、南西壁際で検出した。暗褐色土層面から切り込んでいる。平面形は円形で、規模は径1.05m×1.15m、深さ0.55mを測る。東側は二段掘りとなる。この部分を除いた形状は径0.9mの正円形となるため、二つの土坑が重複している可能性も考えられたが、土層観察の結果によると一つの土坑と判断される。埋土は上層から灰褐色土、茶灰色砂（炭混）、暗褐色土、灰褐色砂質土、暗茶灰色土、暗灰褐色土、灰褐色砂質土である。遺物の出土はなかった。

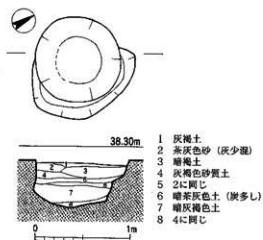


Fig.11 土坑SK4583実測図 (1/40)

ピット

SX4584 調査区の中央部で検出した径0.55m、深さ0.45mのピット。瓦片出土。

SX4585 調査区の東側で検出した径0.32m、深さ0.10mのピット。須臾器出土。

SX4586 調査区の中央部よりやや南側で検出した径0.3m、深さ0.27mのピット。土師器出土。

SX4587 調査区の南側で検出した0.4m×0.35m、深さ0.23mのピット。須臾器出土。

SX4588 調査区の東側で検出した径0.25m、深さ0.14mのピット。須臾器・土師器出土。

SX4589 調査区の南側で検出した径0.2m、深さ0.1mの二段掘りのピット。須臾器出土。

II 大宰府跡の調査

(4) 出土遺物

SD4580出土土器 (Fig.12, PL.11)

須恵器

蓋 (1) 坏蓋。口縁端部は断面三角形を呈する。調整は天井部外面が回転ヘラケズリ、天井部内面がナデ、他はヨコナデ。色調は淡黄灰色。復原口径17.6cm。

坏 (2・3) 共に高台坏。2は断面四角形の低い高台を付す。調整は底部外面がヘラ切り未調整、底部内面がナデ、他はヨコナデ。色調は明青灰色。復原高台径9.2cm。3は高めの高台を付すもので、端部は肥厚する。調整は底部内面がナデ、他はヨコナデ。色調は淡灰色を呈する。復原高台径10.0cm。

SE4582出土土器 (Fig.12)

土師器

皿 (4) 断面三角形の高台を付すもの。調整は底部内面がナデ、他はヨコナデ。色調は淡黄灰色。復原高台径6.2cm。

SX4585出土土器 (Fig.12)

須恵器

坏 (5) 体部の破片。口縁端部は外反する。外面の底部と体部の境は明瞭である。調整はヨコナデ。色調は淡青灰色を呈する。復原口径16.0cm。

SX4586出土土器 (Fig.12, PL.11)

土師器

碗 (6) 直立する高い高台を持つもの。調整は体部が内外面ともミガキ、高台部分はヨコナデ。色調は淡黄褐色を呈する。復原高台径8.0cm。

SX4587出土土器 (Fig.12, PL.11)

須恵器

甕 (12) 底部近くの小破片。内面には同心円の当具痕が残り、外面は細かい平行タタキ。内面の底部側は棒状工具による掘で付けの跡が残る。色調は淡黄灰色を呈する。

SX4588出土土器 (Fig.12)

須恵器

転用碗 蓋 (7・8) 7はつまみの部分。内面は平滑に磨れている。転用碗。色調は淡茶灰色を呈する。8は口縁部の小破片。端部が嘴状に折れ曲がるもの。色調は淡青灰色を呈する。

坏 (9) 断面四角形の低い高台を付すもの。調整は底部内面がナデ、底部外面がヘラ切り未調整、その他はヨコナデ。色調は外面が黒灰色、内面は青灰色。復原高台径9.6cm。

土師器

碗 (10) 調整は底部外面が手持ちヘラケズリ、その他はナデ。器壁が厚い。色調は黄褐色を呈する。胎土は精良。

SX4589出土土器 (Fig.12)

須恵器

壺 (11) 2対ないしは4対の耳を有する壺の肩部付近の破片。調整は外面が細かい格子タタキ、内面には細かい布目が残る、成形時の指頭圧痕が顕著である。色調は茶灰色を呈する。

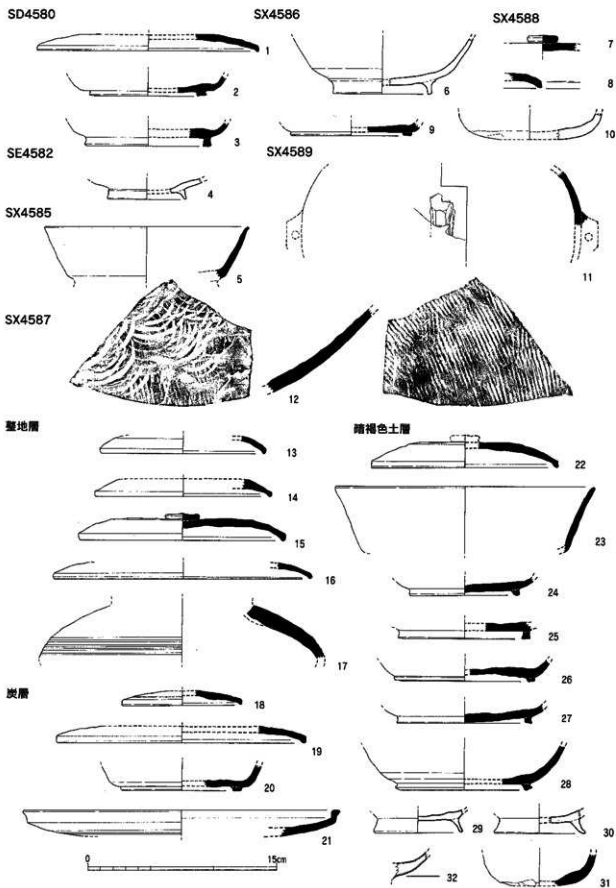


Fig.12 第191次調査出土土器・陶磁器実測図 (1/3)

II 大宰府跡の調査

体部の復原径は22cm程を測る。

整地層出土土器 (Fig.12, PL.11)

須恵器

蓋 (13~16) 口縁部の形状は13が断面三角形, 14~16は端部を丸く収める。調整は13~15の天井部外面が回転ヘラケズリ, 14・15の天井部内面がナデ, その他はヨコナデ。15の天井部付近には線刻様の波状文が長さ約5cmにわたって見られる。色調は13・14が青灰色, 15が青灰色~茶灰色, 16は暗黄褐色を呈する。復原口径はそれぞれ13.2cm, 14.0cm, 16.4cm, 20.6cm。

壺 (17) 肩部の破片。調整は外面上位がヨコナデ, 下位がカキ目, 内面はヨコナデ。色調は灰色~黒茶色。復原体部径は23cm程を測る。

炭層出土土器 (Fig.12, PL.11)

須恵器

蓋 (18・19) 共に口縁端部を断面三角形に折り曲げるもの。調整は18の天井部内面がナデ, その他はヨコナデ。19は天井部外面が回転ヘラケズリ, 他はヨコナデ。色調は共に青灰色を呈する。復原口径は18が9.6cm, 19は19.8cm。

坏 (20) 断面四角形の低い高台を付すもの。調整は底部内面がナデ, 底部外面がヘラ切り未調整, その他はヨコナデ。色調は淡青灰色を呈する。復原高台径9.6cm。

高坏 (21) 坏部の破片。口縁部を肥厚させ, 上面は平坦に仕上げる。調整は坏部外面が回転ヘラケズリ, 坏部内面がナデ, 他はヨコナデ。色調は青灰色~黒灰色を呈する。復原口径25.2cm。

暗褐色土層出土土器 (Fig.12, PL.11)

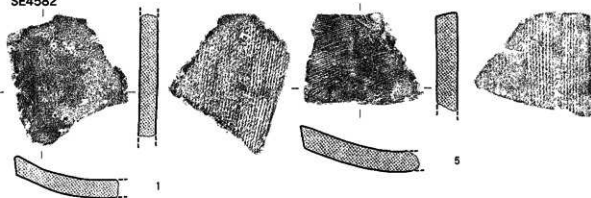
須恵器

蓋 (22) 口縁部を嘴状に折り曲げるもの。調整は天井部外面が回転ヘラケズリで, 他はヨコナデ。色調は青灰色を呈する。復原口径14.8cm。

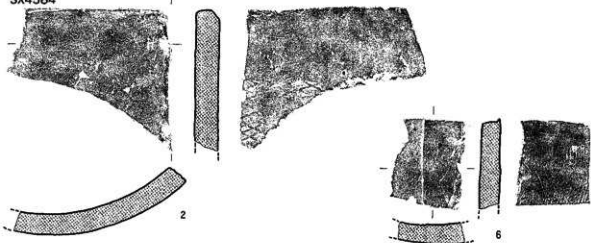
坏 (23~28) 23は口縁部の破片。調整はヨコナデ。色調は淡黄灰色~淡黒灰色を呈する。復原口径20.6cm。24の高台はやや外方に開くもので, 端部は丸く収める。調整は底部内面がナデ, 底部外面がヘラ切り未調整。復原高台径8.8cm。25は高めの細い高台を付す。調整は底部外面が回転ヘラケズリ, 底部内面はナデ。色調は淡灰色を呈する。復原底径10.4cm。26は断面四角形の短い高台を付すもの。調整は底部外面が回転ヘラケズリの後ヨコナデで, 板状圧痕が残る。底部内面はナデ。色調は青灰色を呈する。復原高台径11.2cm。27は断面四角形の高台を付すもの。端部は外方に僅かに突き出す。調整は底部内面がナデで, 磨滅して平滑になっている。底部外面はヘラ切り未調整か。復原高台径10.8cm。28は丸みをもった体部に短くハの字に開く高台を付す。調整は底部外面が回転ヘラケズリ, 底部内面はナデ, その他はナデ。色調は暗茶灰色を呈する。復原高台径10.8cm。

壺 (31) 椀の可能性もある。調整は底部外面がヘラ切り未調整, 底部内面がナデ, 体部外面はナデか。色調は青灰色を呈する。

SE4582



SX4584



藍地層



暗褐色土層



0 20cm

Fig.13 第191次調査出土瓦類実測図 (1/4)

II 大宰府跡の調査

土師器

椀 (29・30) 色調は29が明黄褐色、30が淡黄褐色を呈する。復原高台径は29が7.0cm、30は7.2cm。

青磁

椀 (32) 体部下半の小破片。灰色の胎にやや黄味がかかった緑色の釉を施す。龍泉窯系。

瓦 類 (Fig.13, PL.11)

丸 瓦 (4) 玉緑の丸瓦で、径1cm程の目釘穴がある。暗褐色土層出土。

平 瓦 (1~3・5~8) 凸面のタタキには縄目と斜格子がある。凹面にはいずれも布目が残る。2・7はナデ調整を施す。5・8の凹面は糸切りで、8の側縁部には分割界線と、分割による破面が残る。7は文字瓦で凹面には模骨痕が残る。1はSE4582出土、2はSX4584出土、3は整地層出土、4~8は暗褐色土層出土である。

(5) 小 結

今回の発掘調査区は、既往の調査(第31次・34次・35次・99次調査)によって一本柱跡で圍繞されることが明らかとなった「月山官衙」(東西112m、南北71m)の西端部に位置する。そのため、関連遺構の有無、及び北西側に接する月山丘陵との取り付け状況の把握を主たる目的として調査を行った。

前者にあげた関連遺構の有無に関しては、奈良期の整地層の存在を確認したことがあげられる。従って、後述する地形の旧状からみても、発掘区が官衙域の一面を占めるものと判断される。しかしながら、この整地層から切り込む遺構は、何れも径20~30cm程の小ピットであり、当該官衙域でこれまでに検出された計9棟のうちでも大型の獨立柱建物に伴うような規模の大きな柱窟方は存在しなかった。また、これらのピット群のなかに建物跡として拾えるものがある可能性を有するものの、発掘面積が狭小なため明確にできていない。なお、調査区の東端部で検出した溝SD4580はほぼ南北に走っており、また出土遺物から一本柱跡が存在した時期の所産と捉えることが可能である。

一方、月山丘陵との取り付け状況については、官衙域を確保するための切土部分と、月山丘陵の裾とが接する部分を確認し得たものの、ここには、官衙域と丘陵を限る溝等の施設が存在しなかったことが明らかとなった。また、この部分を官衙域として取り込む際には、当初の丘陵(奈良時代の旧地形)をそれ程改変せず丘陵裾部を僅かに削平し、南側の低い部分には地ならし程度の軽い整地を施していた状況が確認できた。

地ならし程度
の整地

大宰府政庁を取りまく各々の官衙の規模や役割については、未だ詳らかにはない。この様な現状のなかで、一つの明確な区画施設をもってその範囲が知れる月山官衙の性格を特定するといった調査成果は今後に期待したい。

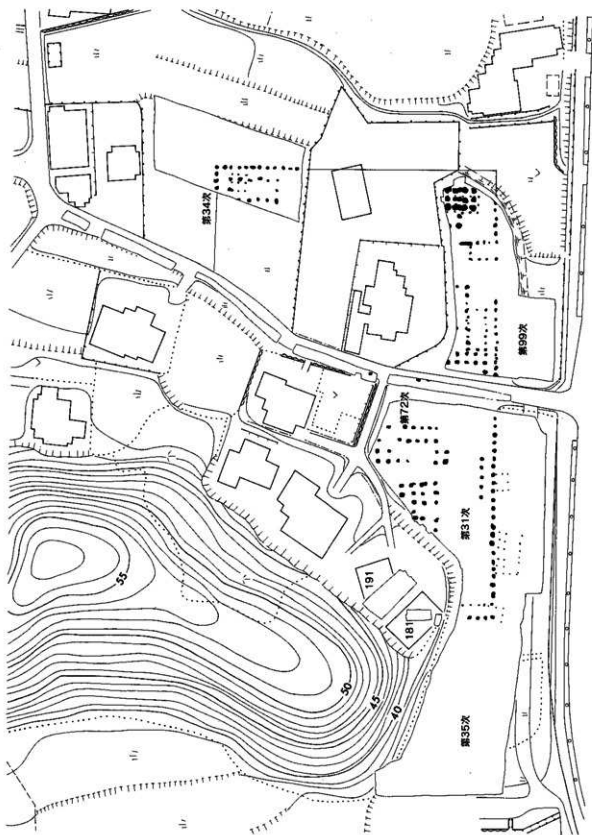


Fig. 14 月山官邸調査地位位置図

II 大宰府跡の調査

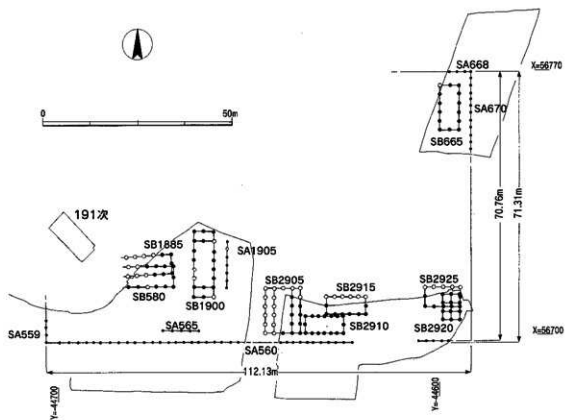


Fig.15 月山官衙跡建物配置図 (1/1,000)

Ⅲ 観世音寺子院跡の調査

1	第189次調査 (安養寺地区の立会調査)	
(1)	調査概要	27
(2)	基本層序	28
(3)	出土遺物	28
(4)	小 結	30

1 第189次調査（安養寺地区の立会調査）

(1) 調査概要

経 過 太宰府市観世音寺4丁目808・809番において、地権者より敷地南側の法面に擁壁を築きたいとの現状変更申請があった。擁壁工事予定地の東隣は、平成13年6月の大雨により土砂崩れを起こし、下の民家の物置に被害をもたらしている。この際、災害時の緊急工事に伴い立会をおこなっているが（第185次調査）、今回は同じ法面の西延長部にあたる。文化庁の指示及び九州歴史資料館との協議により、太宰府市教育委員会が立会調査を実施することになった。調査面積は44㎡である。

工事立会は平成14年8月19日に行った。擁壁基礎を設けるための重機掘削に立ち会い、遺構の有無を確認した。特段、遺構は検出されなかったが、両側が段地形の南端部に沿っていたため、段造成の盛土状況をトレンチ北壁で観察することができた。このため、その後21日まで土層図作成・写真撮影等を行い、その後工事進捗状況を見計らいつつ、立会及び測量等を実施し、同月30日に終了した。

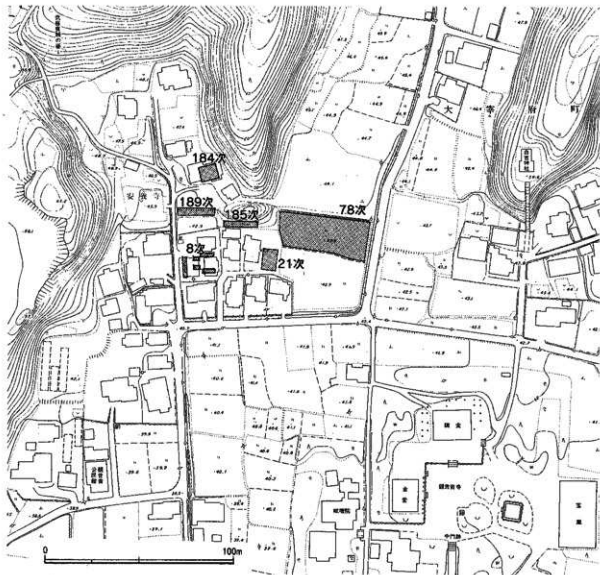


Fig. 16 第189次調査区位置図 (1/2,000)

Ⅲ 観世音寺寺院跡の調査

(2) 基本層序

3時期の盛土造成

土層観察からは3時期の盛土造成の変遷がみられた (PL.12・13)。

最古の時期には、東側尾根斜面の地山を掘削した後、マサ土を版築状に薄く敷きならしつづけた印象を受ける造成で、付近の造成開始時期にあたるものとみられる (12~25層。以下、古段階造成とする)。ここには、砂が20~30cm程の厚さに堆積しており、砂層と砂層の間には若干粘質味のある赤白色粘土 (マサ土の一種) が5~10cmの厚さで堆積するというような層が形成されている。ただ、これは版築ではないようで、土層の硬化はみられない。層全体は安養寺地区の谷の中心部に当たる西側に向かって若干下がっている。盛土の厚さは2.6m以上を測る大規模なもので、工事掘削の関係で谷中心部付近では最深部まで確認はできなかった。なお、この盛土は、さらに南側に続いていたものが、最新段階造成 (ないしは現代の造成) でカットされたことが、掘削底部の層位不整合面の走向から判断される。

次の時期には、トレンチの東端から5mの地点より2m程掘り下げた後、古段階造成と似たようなマサ土で約50cm程の厚さで整地している (9~11層。以下、中段階造成とする)。直上には腐植土層 (8層) が20~35cm程堆積していることから、この腐植土層が中段階造成の地表だったと推測される。この腐植土層からは、瓦片を1点検出した。

さらに次の時期には、中段階造成でできた1.5m程の段差を埋めるような盛土造成を行っている (3~7層。以下、新段階造成とする)。この造成土中には、前時期の造成土である暗灰色土や赤白色マサ土等が大きな土塊となって混入しており、前時期の造成土の掘削及び埋め戻しが大規模に行われたことが窺える。この埋土中には遺物が比較的含量されている。平安時代後期の遺物が出土していることから、それ以降の埋め戻し造成だったとみられる。ただ、遺物の大半は基本的に奈良時代の遺物で、脆弱で取り上げられなかった当時の土師器なども多かった。このことは、付近の土地利用が奈良時代には既に行われていたことを示すものであろう。狭小範囲の調査で断定はできないものの、古段階の造成が付近の造成開始を示すとみられることから、古段階の造成時期が奈良時代に遡るとする判断材料となり得るかも知れない。なお、調査区中央の土層観察ではこの造成土は南に続くようであるが、2・5層と6層が不整合面を形成するようにみえることから、ここに段が存在したことも想定しておく必要があろう。

(3) 出土遺物

出土遺物は数点のみである。このほか土師器片の出土をみたが、殆どが風化により脆弱で取り上げができなかった。僅かに出土した遺物について述べる。

土師器 (Fig.18)

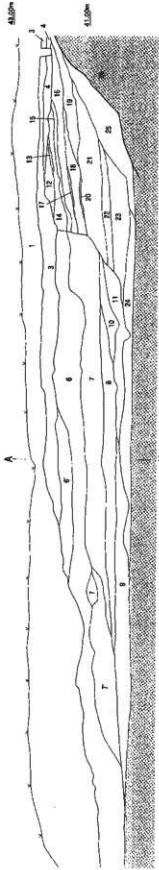
皿 (1) 土師器の小皿である。口径10.2cm、器高1.15cm、底径8.8cm。底部切り離しはヘラ切りである。6~7層から出土した。

白磁 (Fig.18)

碗 (2) 玉縁口縁をもつ白磁碗である。6~7層から出土した。

瓦類 (Fig.18)

丸瓦 (3) 丸瓦の破片である。内外面とも工具によるナデが観察される。9層から出土した。この他図化できなかったものの、須恵器の壺・甕の破片が6~7層より出土している。



- 調査区中央南北土層図 (A-A' 部分)
- 1 表土 (暗灰赤色土、腐物腐植土が中心)
 - 2 表土 (灰赤色土)
 - 3 暗黄赤色土 (赤赤灰色土、暗灰色土土塊含む、腐物多い)
 - 4 暗黄赤色土 (赤赤灰色土、暗灰色土土塊含む、腐物多い)
 - 5 暗赤色土 (暗灰色土、赤赤色土ごくわずかに含む、土層は比較厚)
 - 6 赤褐色土 (暗灰色土、赤赤色土互層よく混在される)
 - 6' 赤褐色土 (暗灰色土、赤赤色土互層20cm程度の大きな土塊を多く含む)
 - 7 赤褐色土 (暗灰色土が多い)
 - 8 暗灰色土 (赤赤色土も塊含む腐植土、中層腐植成後の旧土層面になった可能性もある)
 - 9 暗赤褐色土
 - 10 暗赤灰色土
 - 11 赤褐色土 (赤赤色土、互層状になっているようにも見える)
 - 12 赤褐色土 (腐植層に真砂土、やや赤味が強い)
 - 13 赤褐色土 (腐植層に真砂土、やや赤味が強い)
 - 14 赤赤灰色土 (基本的に真砂土、やや赤味が強い)
 - 15 赤白色粘土
 - 16 赤赤灰色土 (基本的に真砂土、層中も厚層のように粘土との互層がみられる。ただし、腐植層のように互層くない)
 - 17 赤白色粘土 (基本的に真砂土、層中も厚層のように粘土との互層がみられる。ただし、腐植層のように互層くない)
 - 18 赤赤灰色土 (基本的に真砂土、層中も厚層のように粘土との互層がみられる。ただし、腐植層のように互層くない)
 - 19 やや明るい赤赤灰色土 (基本的に真砂土、層中も厚層のように粘土との互層がみられる。ただし、腐植層のように互層くない)
 - 20 赤白色粘土 (基本的に真砂土、層中も厚層のように粘土との互層がみられる。ただし、腐植層のように互層くない)
 - 21 赤赤灰色土 (基本的に真砂土、層中も厚層のように粘土との互層がみられる。ただし、腐植層のように互層くない)
 - 22 赤赤灰色土 (基本的に真砂土、層中も厚層のように粘土との互層がみられる。ただし、腐植層のように互層くない)
 - 23 やや明るい赤赤灰色土 (基本的に真砂土、層中も厚層のように粘土との互層がみられる。ただし、腐植層のように互層くない)
 - 24 赤味のある黄赤灰色土 (基本的に真砂土、層中も厚層のように粘土との互層がみられる。ただし、腐植層のように互層くない)
 - 25 真砂土 (地山流入層)
 - 26 真砂土 (地山)

Fig.17 北壁土層図 (1/100)

III 観世音寺院跡の調査

(4) 小 結

狭小範囲の調査ではあったが、安養寺地区の造成の状況を観察することができた。土層観察の幅は東西11mにも及び、安養寺地区の谷筋の東半分の土層観察を行ったことになる。現在残る段際の土層観察だけでは、土地利用の変遷を十分述べることはできないが、今回の調査で、深い谷を埋めて造成していることや、大きく3度の造成単位を確認したことは、安養寺地区の土地利用を考察する上で成果であったと言える。

土地利用の
変遷

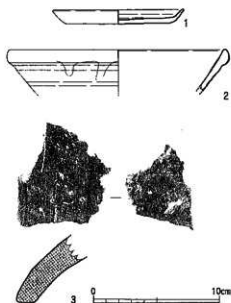


Fig.18 第189次調査出土遺物実測図 (1/3)

IV 水城跡の調査

1 水城跡第36次調査（西端丘陵部の調査）

- | | |
|----------|----|
| (1) 調査概要 | 31 |
| (2) 基本層序 | 33 |
| (3) 検出遺構 | 34 |
| (4) 出土遺物 | 38 |
| (5) 小 結 | 38 |

2 水城跡第37次調査（土塁西端部の調査）

- | | |
|----------|----|
| (1) 調査概要 | 40 |
| (2) 基本層序 | 40 |
| (3) 出土遺物 | 42 |
| (4) 小 結 | 42 |

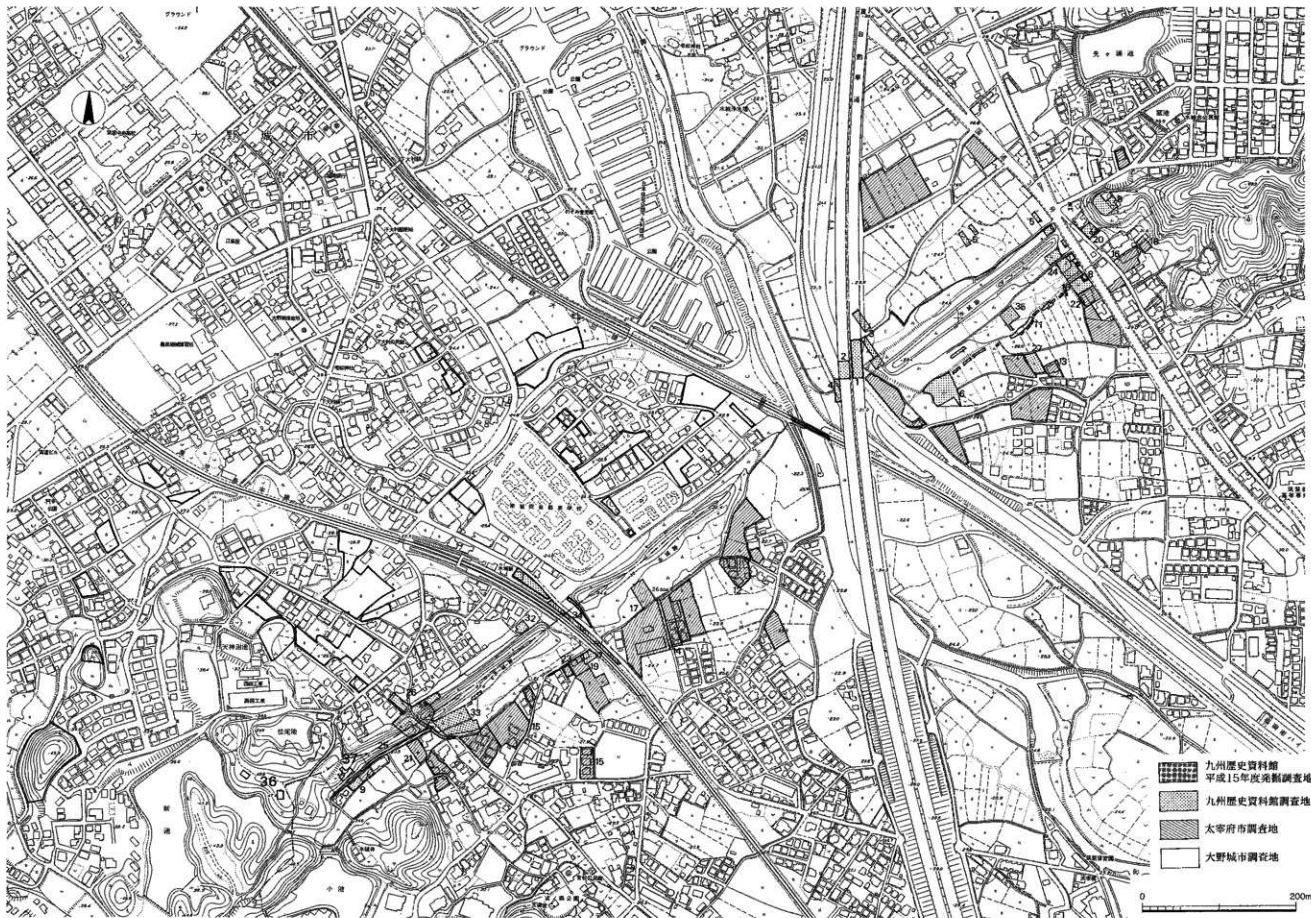


Fig.19 水城跡発掘調査地域図(1/5,000)

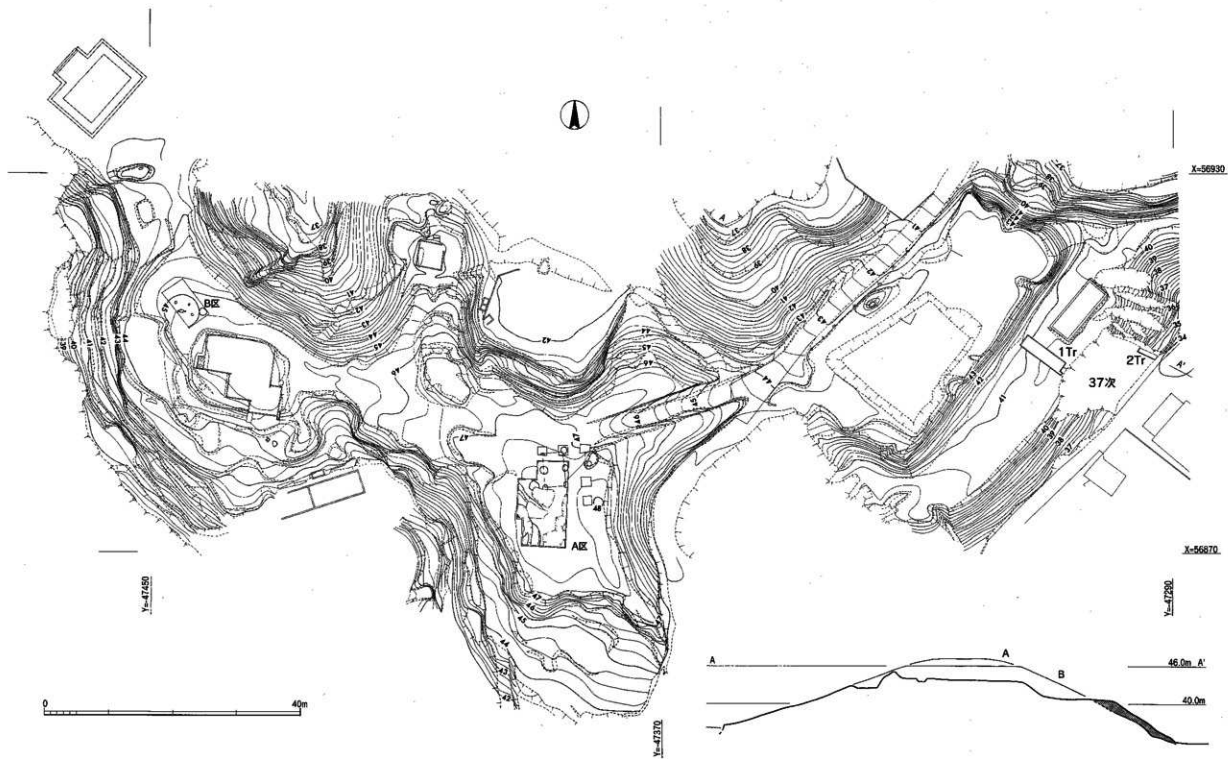


Fig.20 水城新西崙丘陵部地形測量圖 (1/600)

1 水城跡第36次調査(西端丘陵部の調査)

(1) 調査概要

経 過 特別史跡水城跡は、白村江の取戦の翌664年に築堤された長大な土塁で、水城築堤の翌年に築城された大野城・基跡城とともに大宰府防衛の一躍を担っている。これら大宰府史跡の解明及び史跡整備を行うための基礎資料を得ることを目的として、福岡県は昭和43年度から調査計画に則った発掘調査を実施している。

水城跡の史跡整備に伴う計画調査は、昭和49年度から現在まで断続的に実施しているが、この間東門側では木樋取水口の調査、水城の名の由来でもある外濠の確認、積土に伴う数粗朶の検出、瓦工房の発見など多くの成果があった。一方、西門側の調査では、3時期に及ぶ門建物と鴻臚館に接続する古代官道の発見、堰板支柱穴・壁面石垣・基部列石・版築盛土など築堤工法に関する新たな知見がもたらされた。

今回の調査対象地は、大宰府史跡発掘調査第7次5ヶ年計画を策定した時点では、土塁西端の大野城市割取り付き部を予定していた。一方、地域住民からは、史跡指定地を公有化・管理している大野城市に対して史跡地の有効な利用を要望する声が増大しており、市として独自の史跡整備計画を打ち出した。水城跡土塁西端部の丘陵地は、都心部から一步奥まった静寂な山林で、周囲には溜池もあり、最近では周辺住民の散歩コースとなっている場所で、公園として整備するのには格好の地である。また、当該地は近辺で最も眺望のきく高台であり、「矢倉」という小字が残っていることから、水城に関連する望楼施設の存在が予測されていた。以上のことを勘案し、調査地を変更した次第である。

「矢倉」と
言う地名

発掘調査は平成15年9月8日から開始したが、酷暑の中での調査となった。本格的な発掘調査に入る前に調査区周辺の伐採を行い、併せて丘陵部の地形測量を開始した。調査区(A区)を設定し、人力で掘り下げに掛かったのは10日後の9月18日からであった。公有化する以前、A区には民家が建っていたこともあり、かなりの雨平を受け、約16×28mの平坦地となっていた。更に、建物解体時の腐材を埋めた攪乱坑が至る所に掘られていた。

調査区の北東隅で柱掘方を検出したのは、調査を始めて1月後の10月8日である。調査区を北側に拡張するとともに建物の規模をつかむためのサブレンチを設定して掘り下げた。その結果、待望の掘立柱建物を検出した。また、調査区の西側は旧地形の落込となっており、埋土下位から7世紀後半と8世紀前半の須恵器環蓋2点が出土した。

次に、A区から更に西側に55m程行った丘陵鞍部にも調査区を設定し、これをB区とした。B区は10月16日から人力で掘り下げを行った。赤褐色粘質土が円形に廻り、風礫石も出土したことから円形住居になる可能性が疑われた。掘り下げた結果、弥生時代前期末頃と考えられる円形堅穴住居となった。A地区でも野蔵穴1基を検出しており、弥生時代においては集落として土地利用されていることが判明した。

弥生時代は
集落

10月26日の日曜日に現地説明会を行い、地域住民を中心として80名程の参加者があった。10月30日には指導委員会委員の現地視察があり、A区検出の建物に関して望楼の可能性を考えても良いのではとの意見を頂戴した。11月18日に気球による写真撮影を実施し、1/20の実測作業を終了した後、掘立柱建物・堅穴住居の断面を行った。

望楼の可能
性

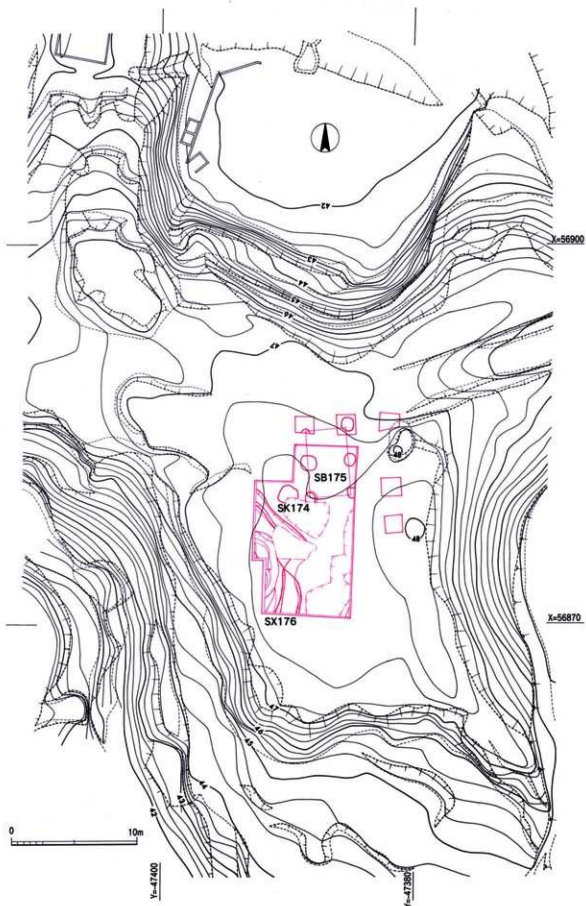


Fig.21 A区周辺地形測量図 (1/300)

これで、今回の調査は一週りの目処が付いたので、7月19日の集中豪雨によって土壁崩壊が起きた土壁西端部の調査にシフトした。この調査は、計画調査の期間内で対応したが、崩壊箇所が太宰府市側でもあり、調査次数を新たに設け、水城跡第37次調査とした。崩壊部分の法面を精査し、土層写真・土層図を作成し、調査を終了した。

なお、調査の終盤は酷暑の中での作業であったが、事故もなく順調に進行し、発掘調査自体は12月19日に終了した。その後、地形測量を年末の12月25日まで行ったが終わらず、追加測量を翌年の1月13日まで実施し、本年度における水城跡の計画調査を完了した。なお、調査区の理め戻しは、一部人力で行ったが、埋め戻しと填圧には重機を用いた。

位 水城跡は東の四王寺山と西側の青振山系から派生した丘陵を繋ぐ形で構築されているが、調査地は水城跡土壁本体が自然丘陵に接続する西端取り付き部から更に100m程西側の丘陵部にあたり、最高所で標高48.02mを測る。

2箇所に調査区を設定し、丘陵東側の平坦部に設けたトレンチをA区、西側の丘陵鞍部に設けたトレンチをB区とした。地番は大野城市下大利4丁目757-1番であり、調査面積はA区が92㎡で、B区が28㎡を測る。

(2) 基本層序

前述した如く、現在みるA区の平坦地形は、家屋の建築・解体による著しい削平・掘削の結果であり、調査区の南東部から北西部にかけては旧地形を全く留めていない。辛うじて、南西部で検出した落込によって土層の堆積状況が知られる。

調査区南壁 (Fig. 22上段)・西壁 (Fig. 22下段)を観察すると、現地表から50~56cm下までが家屋建築による整地層及び攪乱土で、西壁土層図中程の強調した線が旧土土面である。それ以下が落込の堆積土

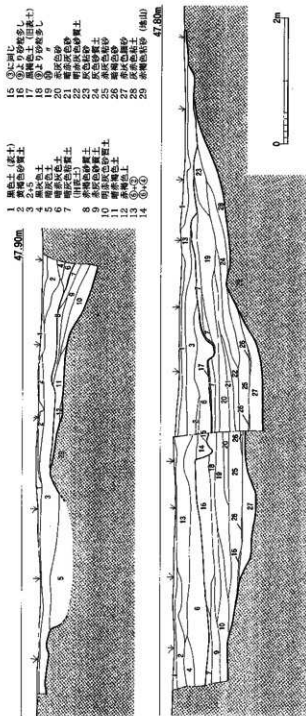


Fig.22 A区土層図 (1/60)

IV 水城跡の調査

で、赤灰色砂質土を主体とする。地山は花崗岩ハイラン土の上に乗る赤褐色粘質土であるが、調査区の南東から北西部にかけては花崗岩ハイラン土がみられる。

(3) 検出遺構

A区においては、掘立柱建物1棟、貯蔵穴1基、旧地形の落込を検出した。

掘立柱建物

SB175 (Fig.23, PL.16)

調査区の北端部で検出した。著しい削平を受けており、柱穴底面を辛うじて留める程度の残存状況である。後述する貯蔵穴の深さが1m足らずなので、既に1m以上は削平されたものと考えられる。規模は桁行2間×梁行1間の南北棟建物で、東桁行は座標北から西に6°30′振れている。また、柱痕跡が確認できなかったため正確な柱間は測り得ないが、P1-3の底面中央を結ぶと桁行長5.4m(9尺等間)となる。なお、梁行は3.3m(11尺)として繰引きした。柱穴の掘方は楕円形を呈し、長軸0.86~1.1m、短軸0.86~0.88mを測る。埋土はP1・2が赤褐色粘質土で、P3~5は赤褐色土に灰白色砂を含む土で、何れの柱穴からも遺物は出土しなかった。

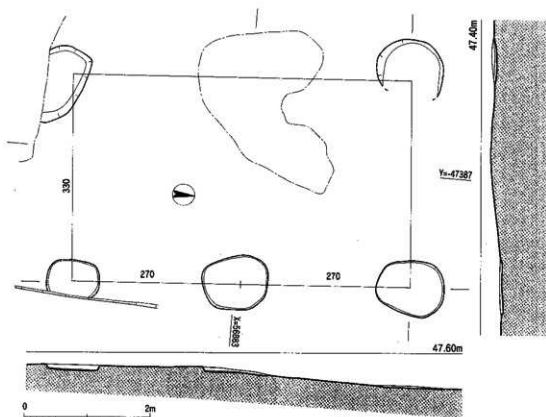


Fig.23 掘立柱建物SB175実測図 (1/60)

貯蔵穴

SK174 (Fig.24, PL.16-2)

調査区の北西部で検出した。所謂、袋状土坑で、上面形は不整形円形を呈する。上面で径

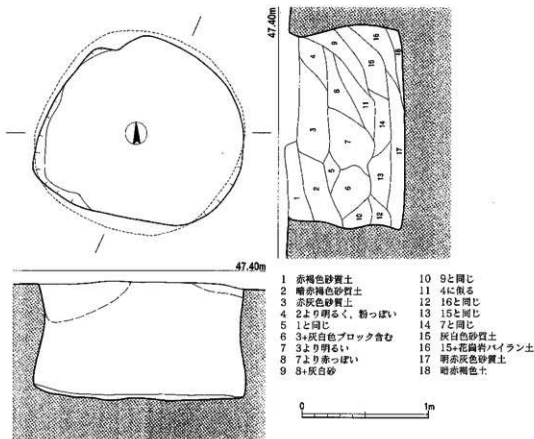


Fig.24 貯蔵穴SK174実測図 (1/30)

1.45~1.68m、底面で径1.55~1.59mを測り、壁高は0.93mの遺存状態である。底面はほぼ水平で、壁面は上部に向かって窄まりを見せる。埋土は赤褐色砂質土を主体とし、地山の花崗岩パイラン土（壁面の崩落土）もみられる。出土遺物は石斧の細片かと思われる石器片が出土したのみ。土器の出上はなかったが、貯蔵穴の形状からして弥生時代前期末頃の所産かと思われる。

落込

SX176 (Fig.22, PL.16-3)

調査区の西側で検出した旧地形の落込で、南西側に深くになっている。落込の埋土は、基本的に地山（赤褐色粘質土）流出土の斜面堆積で、北東側からの流入によるものである。深さは調査区南西隅部で0.87m、西壁中央部で1.38mを測る。埋土下位から7世紀後半と8世紀前半の須恵器坏蓋2点及び須恵器片・弥生土器小片が出土した程度である。この須恵器は、掘立柱建物の年代を考える上で重要な意味を持つものである。

B区においては、竪穴住居1基、土坑1基を検出した。

竪穴住居

SI177 (Fig.26, PL.17-2・3)

調査区の南半部において検出した。丁度、トレンチに半分が掛かる格好となったが、取って完掘しなかった。平面形は円形を呈し、径5.5mを測る。壁高は南壁側で0.48mの遺存状態である。主柱穴は3本確認したが、同心円で柱穴を割り付けると5本柱となる。柱穴は径0.4

円形住居跡

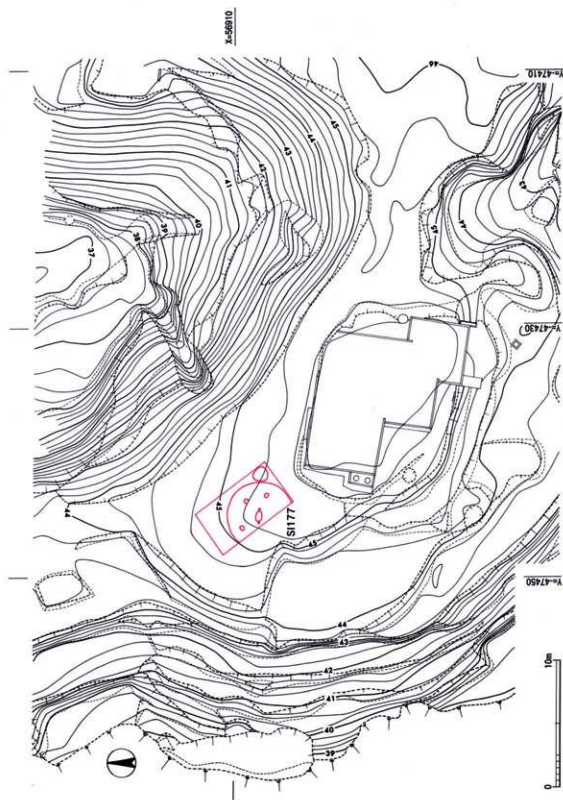


Fig.25 B区周辺地形測量図 (1/300)

mの楕円形を呈し、深さは0.7~0.8mと腕を伸ばしても底に届かないほど深く掘られている。床面中央には長軸0.83m、短軸0.47mの楕円形土坑と二対の小ピットがあり、所謂、松菊里タイプの住居である。この楕円形土坑からは、黒曜石剥片と木炭が出土したが、壁面・底面は全く火熱を受けておらず、屋内炉ではない。床面はほぼ水平で、灰白色土による貼床を施しており、主柱間には堅く踏み締められていた。出土遺物は黒曜石の剥片十数点と豊かと思われる弥生土器の胴部小片が1点出土したのみである。

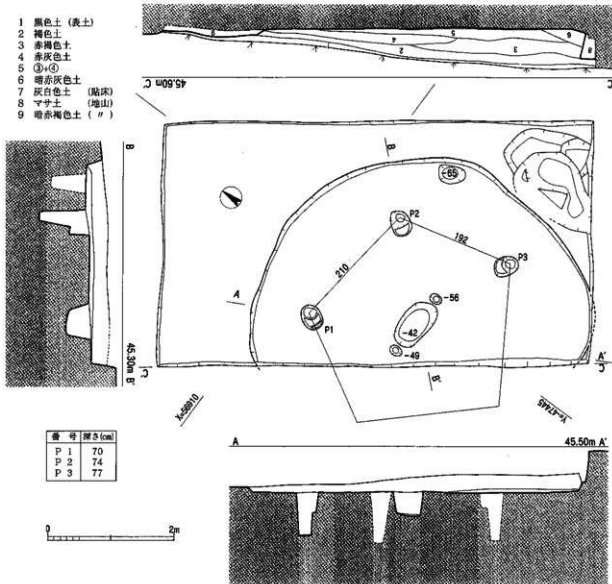


Fig.26 竪穴住居 S1177実測図 (1/60)

土坑

SK178 (Fig.27, PL.17-2)

調査区の東コーナー部で検出した。竪穴住居と重複し、住居跡より後出する。南半部は調査区外に延びるため規模は不明であるが、平面形は不整形を呈する。北側から東側にかけてテラスを有する。検出面からの深さは0.74mを測る。遺物の出土はなかった。

IV 水城跡の調査

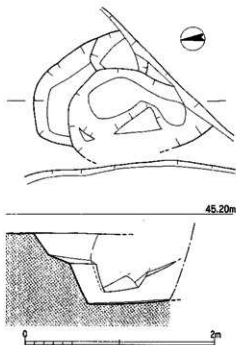


Fig.27 土坑SK178実測図 (1/40)

須恵器 (Fig.28, PL.19-3)

蓋 (1・2) 1は口縁部内面にかえりを有する坏蓋で、かえり部分と天井部は接合しないが、胎土・色調・手法が類似することから同一個体として復原した。口縁部ヨコナテ、天井部外面回転ヘラケズリ、内面ナテ調整による。胎土に白色砂粒を多く含む。焼成はやや軟質で、色調は暗灰色を呈する。残存器高2.5cm、復原口径14.5cm、復原かえり径11.8cm。2は坏蓋の口縁部小片で、口径は17.3cmに復原した。口縁端部は三角形を呈し、立ち上がりも高い。口縁部はヨコナテ調整による。焼成はやや軟質で灰色を呈する。

(5) 小 結

今次調査ではA区において掘立柱建物・貯蔵穴・旧地形の落込、B区においては竪穴住居・土坑を検出した。掘立柱建物は遺存状態が非常に悪かったものの、辛うじて掘方底面を留めていた。建物規模は梁行1間 (3.3m) × 桁行2間 (5.4m) の南北棟建物で、桁行は西側に6"ほど振っている。

この掘立柱建物SB175の性格としては、水城土塁に接続する北西側 (博多側) 丘陵部に立地すること。最高所が標高48.02mと近辺では最も眺望の利く高所に構築されていること。建物の構造が掘立柱形式で、梁行が官衛建物に比較して長いこと。建物に直接伴う出土遺物はないが、落込SX176出土須恵器が建物に関連するとみられること。周辺の小字に「矢倉」と言う地名が存在すること。以上のことから、当建物は望楼の可能性が考えられる。

怡土城跡 望楼建物の好例としては、前原市怡土城跡が著名である。怡土城は大宰大式として当地に赴任していた吉備高備が対新羅政策のために筑前国北西部の高祖山に築いた山城で、天平勝宝8年 (756) に築城に着手し、12年の歳月を経た神護景雲2年 (768) に完成をみた。望楼建物は現在までに7箇所確認されているが¹⁾、何れも梁行2間×桁行3間の瓦葺き礎石建物であり、

(4) 出土遺物

A区の落込からは須恵器片と弥生土器小片、貯蔵穴からは石磨細片、B区の竪穴住居からは弥生土器小片と黒曜石剥片が出土しているが、須恵器のみを報告しておく。

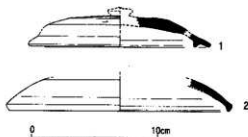


Fig.28 落込SX176出土土器実測図 (1/3)

眺望の利く丘陵頂部に構築されている。

さて、水城跡第36次調査検出の掘立柱建物を望楼と考えたが、望楼自体の役割は敵軍の動向を見張るための哨戒施設であり、そのためには眺望の利く場所に設置するのは当然のことである。水城本堤の西方には、谷部を塞ぐ形で上大利土塁・春日土塁・小倉土塁・大土居土塁・小水城・天神山土塁といった小水城が築造され、大野城から水城を経て基肄城までを結び大宰府を防御したライン—大宰府羅城—が想定されている。これまでは、水城大堤や小水城土塁本体部分の大宰府羅城の調査しかされていないが、大野城と水城を結ぶ丘陵上や小水城同士を結ぶ丘陵上にも欄・土塁などの防御施設が存在するのか、単なる丘陵のみか、望楼と連動した情報伝達施設である烽火場烽火場の発見を含めて視野を広げる必要がでてきた。

弥生時代の遺構としては、円形竪穴住居・貯蔵穴・土坑がある。出土土器が僅かであるため詳細な時期を明らかにし得ないが、住居形態及び貯蔵穴の形状から前期末頃の所産であろう。納骨堂の位置する平坦面でも黒曜石剣片を採集しており、その箇所にも住居が存在したものと思われる。また、現在では溜め池となっているが、丘陵西側に谷水田の想定が可能であり、当丘陵は北西部に延びる瘦せ尾根であることを考え合わせると、集落眼下の谷部において水稲耕作を営んだ小規模な集落が思い描かれる。

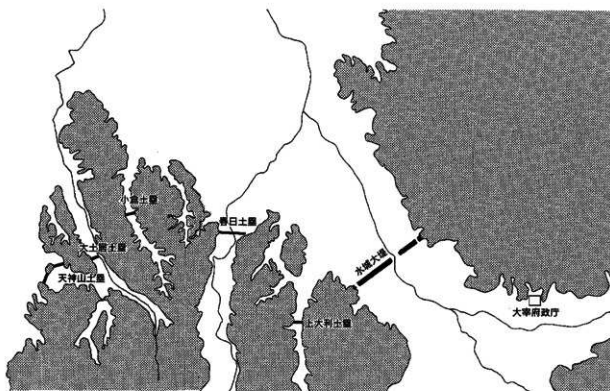


Fig.29 大宰府羅城概念図

註1) 『怡土城址の調査他』 1974復刊 日本古文化研究所

2) 阿部義平 「日本列島における都城形成—大宰府羅城の復元を中心に—」

『国立歴史民俗博物館研究報告第36集』 1991 国立歴史民俗博物館

2 水城跡第37次調査(土塁西端部の調査)

(1) 調査概要

経 過 平成15年7月19日未明頃、太宰府市域を襲った集中豪雨は、大規模な土石流を引き起こし、市民生活に甚大な被害をもたらした。大宰府史跡が被災した被害も未曾有のものであり、この時に水城跡西端土塁の一部（幅15m×斜面距離15m）が崩壊し、流出した土砂が水城土塁と市道を隔てて建っているアパートを直撃した。幸い、人的な被害はなく、家屋・自動車等の器物の損壊に留まった。太宰府市側はすぐさま崩落した土砂及び樹木の撤去作業を実施したが、土塁の本格的な修復作業は年度末頃になりそうだと言うことであった。

太宰府市の文化財担当職員は、災害復旧と日常業務に追われ、水城跡の調査までは手が回らない状況下であり、史跡地内の発掘調査は当館が実施してきたという経緯もあり、太宰府市との協議の結果、当館が発掘調査を行うこととなった。当方としては、年末までに発掘調査報告書の作成、年明けには観世音寺講堂跡の再調査、更に平成16年度の特別展の準備等々と年度内事業が目白押しであり、調査に入るとしたら水城跡第36次調査と並行して実施したいと考えていた。また、土塁崩壊箇所が太宰府市側であり、緊急調査でもあったので調査次数を新た



Fig.30 水城跡第36・37次調査地位位置図 (1/2,500)

に設け、水城跡第37次調査とした。

水城跡第37次調査は、第36次調査が一週りの目処がついた平成15年12月5日から着手したものの、第36次調査の残務である掘立柱建物・竪穴住居の断割り、調査区の埋め戻し、地形測量作業などが片付いておらず、両者を並行して行う格好となった。崩壊した土塁法面を精査し、土層写真・土層図を作成し、12月19日に第37次調査を終了した。

位置 調査地は、水城跡土塁本体が自然丘陵に接続する西端取り付き部のやや南西側で、地番は太宰府市大字吉松475-13番である。

(2) 基本層序

崩壊した斜面部分の上面は、長さ52m×幅10m程の平坦面となっていた。この平坦面は、土塁上に建てられた小屋の造成に伴うものではないかとする意見があった。また、指導委員会の折、水城土塁の復旧工事に先立って、何処までか版築土塁で、何処からか自然丘陵であるのか確認する必要があるとの指導を受けており、平坦面に幅2m×長さ8mのトレンチを設けて掘り下げた。また、崩壊部分については、法面の土層観察を主体とした。

土層の堆積状況は、上層から①表土(1層)、②赤褐色土とマサ土の混合土(2・3層)、③赤褐色土(5層)、④黒色土(8層・旧表土)、⑤暗赤褐色土(9層・包含層)、⑥赤褐色土(地山)であり、旧表土上に薄い所で50cm、厚い所で180cm程の土砂の堆積がみられた。この②～⑤層は全く締まりが無く、水平堆積をなしていないことから水城築堤時の版築土ではなく、後世(昭和初期頃か)、小屋を建てるために丘陵斜面をカットし、その排出土砂を旧地形上に客土したものと考えられる。また、旧表土の④層下位にも版築土が認められないことから、崩壊した部位は水城跡本体に連続する自然丘陵であることが判明した。

自然丘陵

なお、平坦面のトレンチでも南西側に下がる旧表土(5層)をつかんでおり、自然丘陵が削平されたことを示している。平坦面の上方にも畑として耕作されている幅20m×長さ42mの平坦地がある。この部分は家屋を建設するために削平したと地主から聞いており、この部分を先の旧表土から復原するとFig.20の断面図となり、削平の高さを3mと想定した線がA、2mと想定した線がBである。形状的にはAの方がなだらかであることから、現地地形からすると3m削平されたものと推測される。

(3) 出土遺物

崩壊部分中程で、旧表土下の暗赤褐色土(9層)中から須恵器が出土した。

須恵器 (Fig.32, PL.19-4)

蓋(1・2) 1は坏蓋の口縁部小片。口縁部は三角形を呈し、立ち上がりも高めである。2も坏蓋の口縁部片であるが、口縁部内面に僅かな段を有する程度である。口径は14cmに復原した。何れも焼成は堅緻で、色調は1が暗灰色、2は青灰色を呈する。

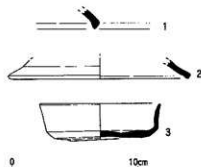
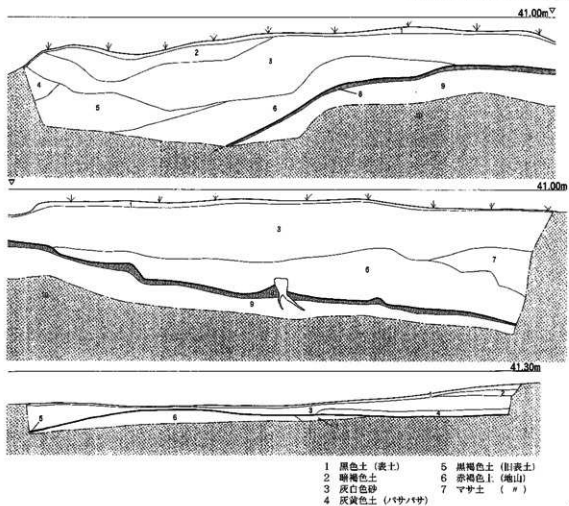
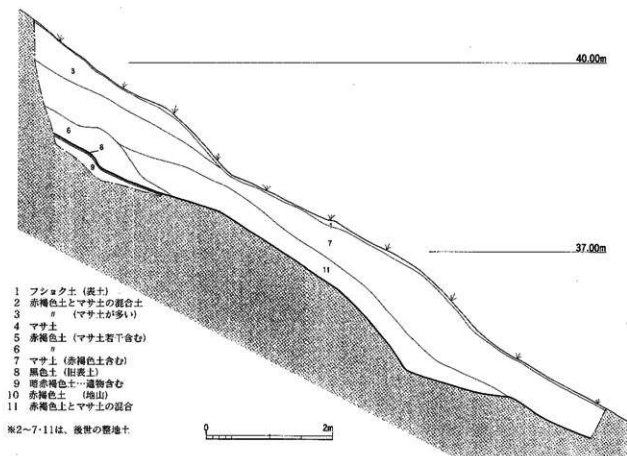


Fig.31 包含層出土土器実測図(1/3)



坏 (3) 小型の坏で、口縁部は平坦な底部から直線気味に立ち上がる。口料部はシャープである。口縁部ヨコナテ、外底部ヘラケズリ、内面ナテ調整による。胎土に砂粒を若干含む。焼成は堅緻で内面暗青灰色、外面紫灰色を呈する。1は8世紀前半、2は8世紀末、3は7世紀中頃と考えられる。

(4) 小 結

水城跡第37次調査は、上屋西端部の緊急調査として実施した。土層観察の結果、崩壊した土砂は全く締まりが無く、版築による水平堆積を成していないことから水城築堤時の版築土ではなく、後世（昭和初期頃か）、小屋を建てるために丘陵斜面をカットし、その排出土砂を旧地形上に客土したものと考えられる。また、旧表土下位にも版築土層が認められないことから、崩壊した部位は水城跡本体に連続する自然丘陵であることが判明した。

崩壊土は客土した土

従って、崩壊部位周辺の土砂 (①～⑦・⑩層) を除去しても水城跡本体に伴う盛土ではないため遺構的にみて何ら支障がないものと判断される。却って、客土部分を全て取り除き、旧表土を露出させ、その面に補強土工を施した方が地盤が安定し、更なる崩壊を防ぐことが可能になると思われる。

V 水城跡西端丘陵採集土器

(1) 経緯

水城跡第36次調査は、平成15年9月8日から開始したが、発掘調査と併せて1/100縮尺による詳細な地形測量を実施した。また、測量と同時に周辺丘陵の踏査を行い、遺跡・遺物の発見に努めた。平成15年10月1日に行った踏査の際、新池と小池を隔てる丘陵斜面の崩落上中 (Fig.30の×印) に須恵器が埋まっているのを発見した。

(2) 採集土器

採集した土器は、何れも須恵器で、坏蓋片1点、高坏片1点、甕片8点で、ビニール袋1袋分であった。なお、遺物発見届は、水城跡第36次調査出土品と併せて届け出ている。

須恵器 (Fig.33, PL.19-5)

蓋 (1) 蓋の口縁部破片。焼き歪みにより天井部は下がっている。口縁部ヨコナテ、外天井部回転ヘラケズリによる。口径は14.5cmに復原した。焼成は堅緻で、灰青色を呈する。

高坏 (2) 外面に長方形スカシ孔のあたりが沈線として残っていることから有蓋高坏の坏部と考えられる。立ち上がりは直立気味で、口唇部はシャープである。口縁部ヨコナテ、外面粗いカキ目 (7~8条/cm) による。焼成は堅緻で、暗灰色を呈する。

甕 (3~5) 甕の胴部破片で、傾きには些か自信がない。調整は何れも外面擬格子タタキで、内面には同心円当具痕がみられる。色調からして3点は別個体。

時期的には6世紀後半の所産で、採集地点に何らかの遺構が存在するものと思われる。

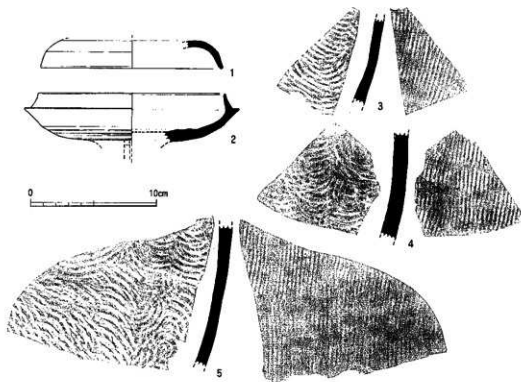


Fig.33 西端丘陵採集土器実測図 (1/3)

P L A T E S



(1) 第186次調査区北半(南から)



(2) 第186次補足調査区全景(南から)



(1) 第190次調査区(南西から)



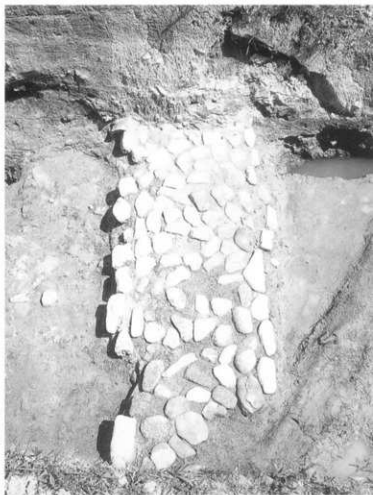
(2) 調査区西壁土層(東から)



(1) 第15次調査区(西から)



(2) 石敷道橋 S X346(東から)



(3) 石敷道橋 S X346(南から)



(1) 回廊S C 350基壇化框(北東から)



(2) 暗渠S X 356吐水口周辺の石積み(北東から)



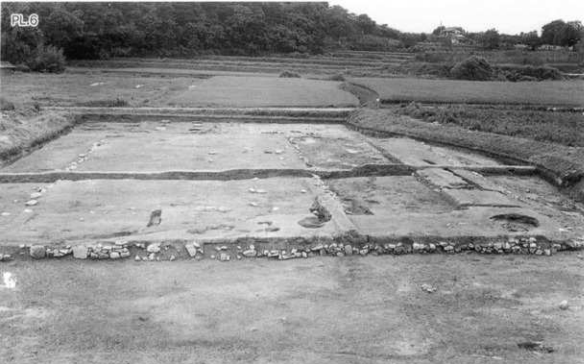
(1) 第26次調査区全景(東から)



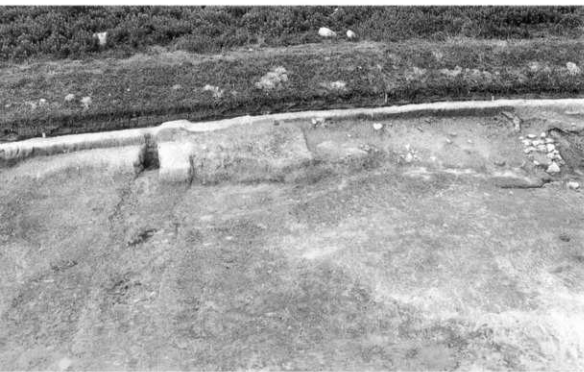
(2) 溝S D501、石列遺構S X503(南から)



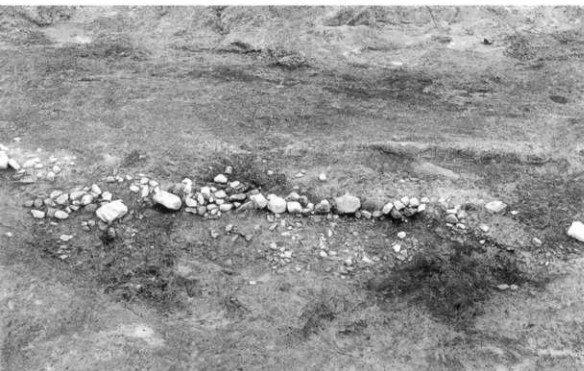
(3) 溝S D501(北から)



(1) 第26次調査築地 S A
335・505(東から)



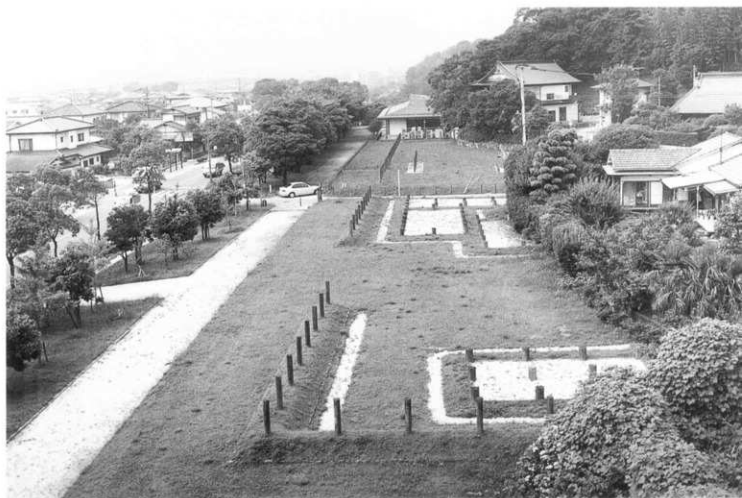
(2) 基壇状遺構 S X 502
(南から)



(3) 石列遺構 S X 503
(東から)



(1) 第191次調査区遠景(気球写真・東上空から)



(2) 第191次調査区遠景(気球写真・東から)



(1) 第191次調査区全景(気球写真・東上空から)



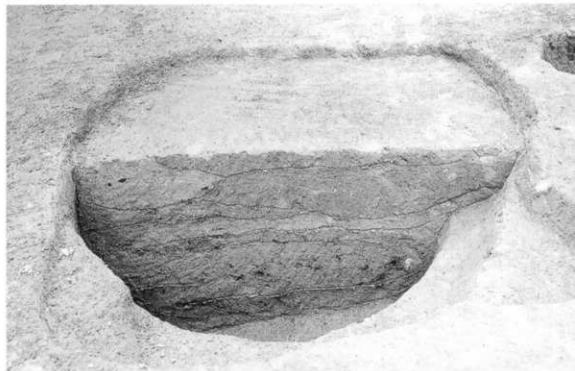
(2) 第191次調査区全景
(気球写真・真上から)



(1) 第191次調査区全景
(南東から)



(2) 第191次調査区全景
(北西から)



(3) 土坑S K4583土層
(南東から)



(1) 第31次調査区全景(南から)



(2) 第31次調査区全景(東から)



(3) 第34次調査区全景(東から)



12-6



12-11



12-12



12-15



12-17



12-20



12-22



12-24



12-26



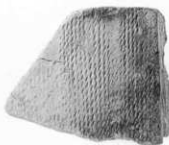
13-1



13-2



13-4



13-5



13-7



13-8



(1) 第189次調査区北壁
(東から)



(2) 調査区中央南北土層
(東から)



(3) 調査区東壁(西から)



(2) 調査完了時(西から)

(1) 調査区北壁土層(南から)



水城跡から大野城跡を臨む(気球写真・南上空から)



(1) 水城跡第36次調査A区全景(南から)



(2) 水城跡第36次調査A区全景(北から)



(1) 竪立柱建物SB175
(南から)



(2) 貯蔵穴SK174
土層(東から)



(3) 釜込SX176
土層(東から)



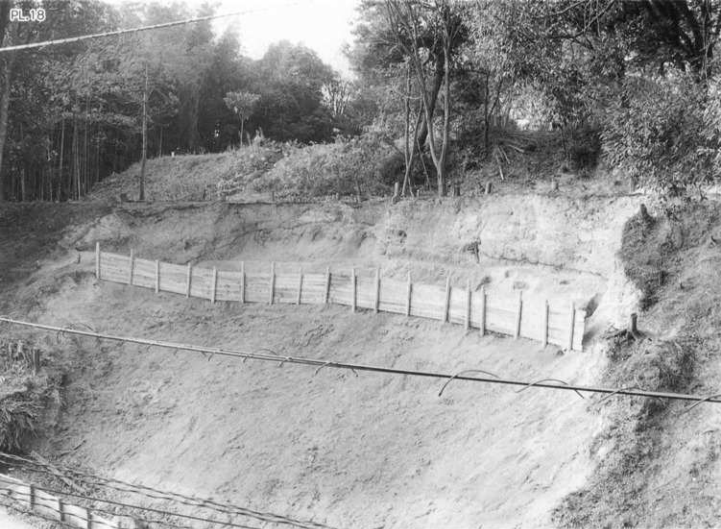
(1) B区全景(気球写真・西から)



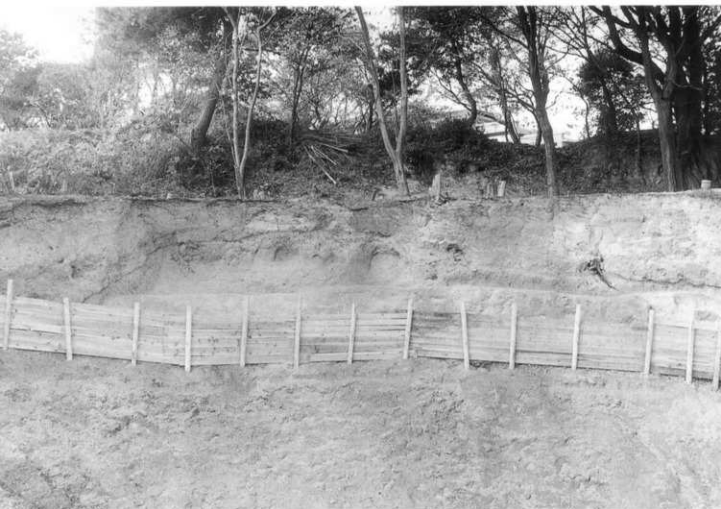
(2) 竪穴住居S 1177
(南東から)



(3) S 1177上層
(東から)



(1) 水城跡第37次調査区(東から)



(2) 土塁崩落箇所壁面(南東から)



(1) 土砂堆積状況(南西から)



(2) 平坦面トレンチ(北西から)



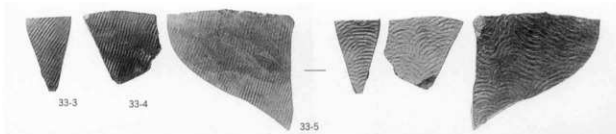
28-1

(3) 水城跡第36次調査落込S X 176出土土器



31-3

(4) 水城跡第37次調査包含層出土土器



(5) 西端丘陵部採集土器

報告書抄録

ふりがな	だざいふしせきはつちつちようさほうこくしょ							
書名	大宰府史跡発掘調査報告書							
副書名								
巻次	平成15年度							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	高橋章・小田和利(編集)・吉村靖徳・井上信正							
編集機関	九州歴史資料館							
所在地	〒818-0118 福岡県太宰府市石坂4-7-1 TEL092-923-0404							
発行年月日	2004年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
大宰府史跡 第186次調査	太宰府市観世音寺2丁目 217番	40221		33 30 35	130 30 48	030310 ~030317	42㎡	市道建設
大宰府史跡 第189次調査	太宰府市観世音寺4丁目 808・809番	40221	210044	33 30 47	130 31 20	020819 ~020830	44㎡	埋蔵建設
大宰府史跡 第190次調査	太宰府市観世音寺4丁目 535-1番	40221		33 30 40	130 31 06	030114 ~030115	22.5㎡	トイレ改修
大宰府史跡 第191次調査	太宰府市観世音寺559-2番	40221		33 30 38	130 31 09	030604 ~030717	80㎡	建物改築
水城跡 第36次調査	大野城市下大利4丁目 757-1番他	40219	190130	33 30 42	130 29 16	030908 ~040113	120㎡	計画調査
水城跡 第37次調査	太宰府市吉松475-13番	40219	190130	33 30 44	130 29 20	031205 ~031219	30㎡	土塁修復
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
大宰府史跡 第186次補足調査	官衙	奈良時代						
大宰府史跡 第189次調査	寺院	平安後期	整地層		土師器・瓦類		3回の土地造成	
大宰府史跡 第190次調査	官衙							
大宰府史跡 第191次調査	官衙		溝 井戸 土坑	2条 1基 1基	須恵器・土師器・瓦類		官衙と月山を限る 施設は存在してい ない	
水城跡 第36次調査	土塁	白鳳時代	掘立柱建物 竪穴住居 貯蔵穴 土坑 落込	1棟 1軒 1基 1基 1基	黒曜石 須恵器		水城土塁西端部丘 陵で望楼を発見	
水城跡 第37次調査	土塁	白鳳時代	包含層		須恵器		崩落土は後世の客 土と判明	

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2117104
登録年度 15	登録番号 2

大宰府史跡発掘調査報告書

平成15年度

平成16年3月31日

発行 九州歴史資料館
太宰府市石坂4丁目7番1号
印刷 株式会社 三光
福岡市博多区山王1丁目14-4